

324
142

良辨僧正御傳記

016332-000-5

324-142

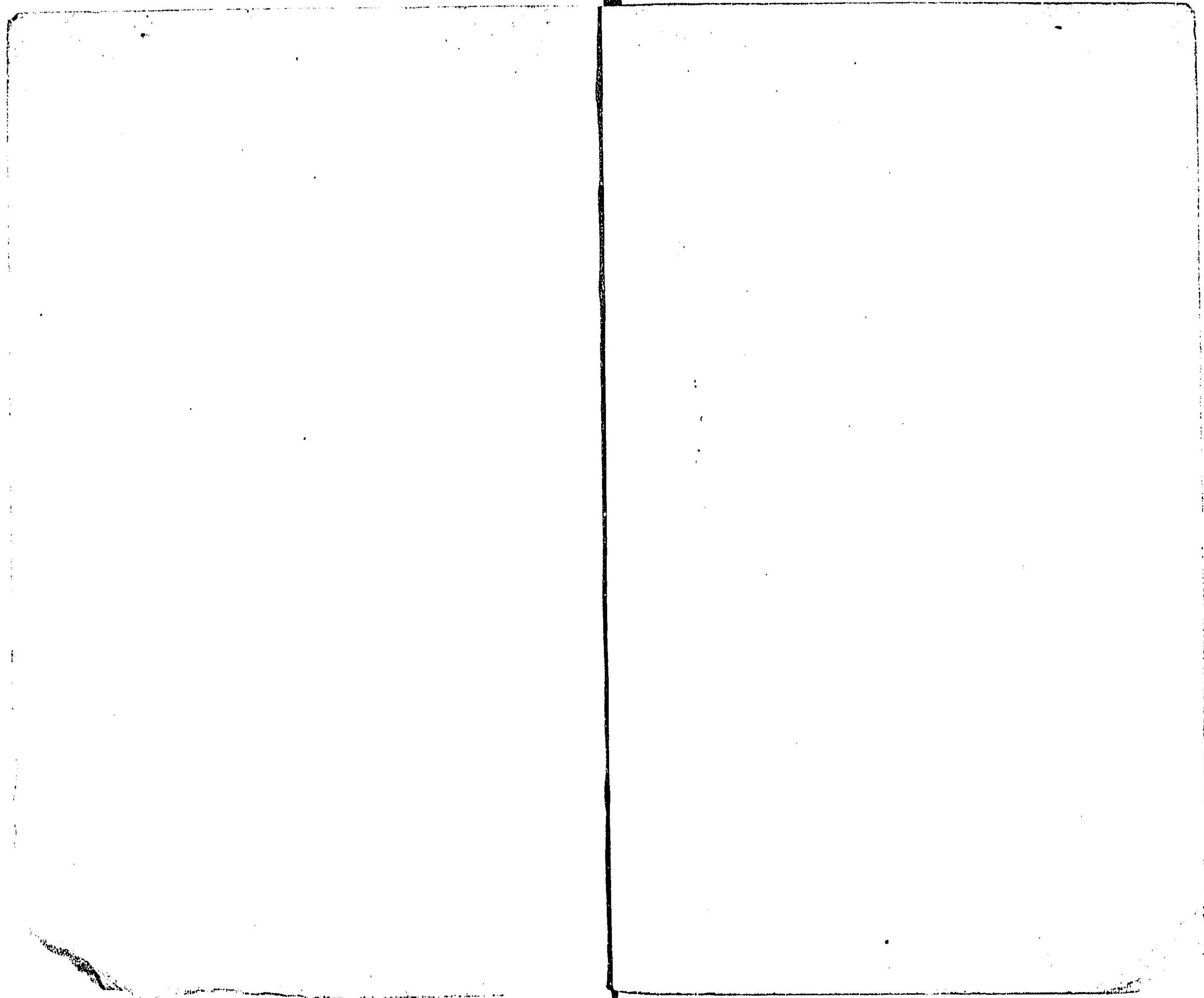
良辨僧正御傳記

稻垣 晋清 / 編

M42.8

ABD-0274







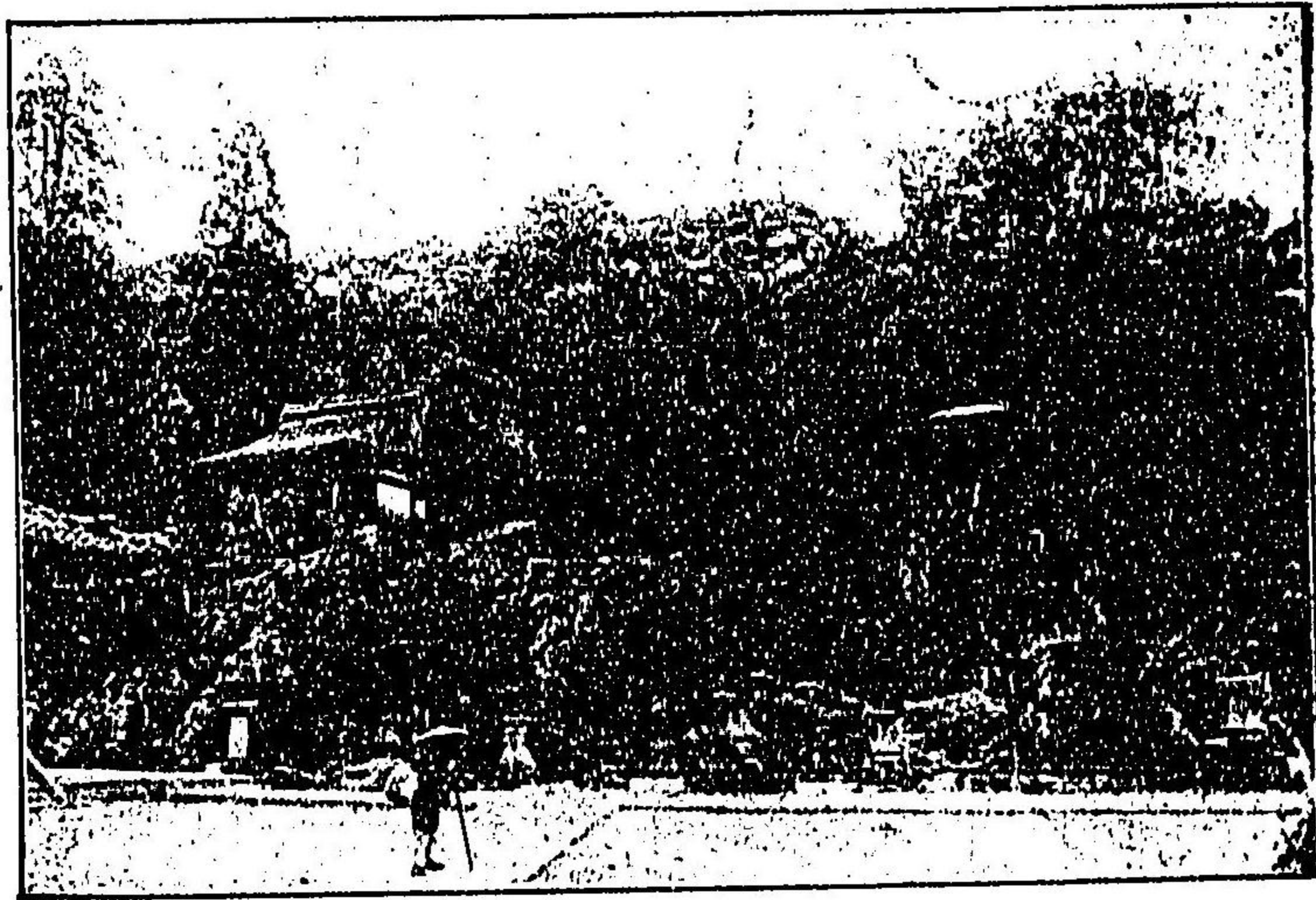
形眞御身等正僧辨良寶國
(置安堂山開寺大東)



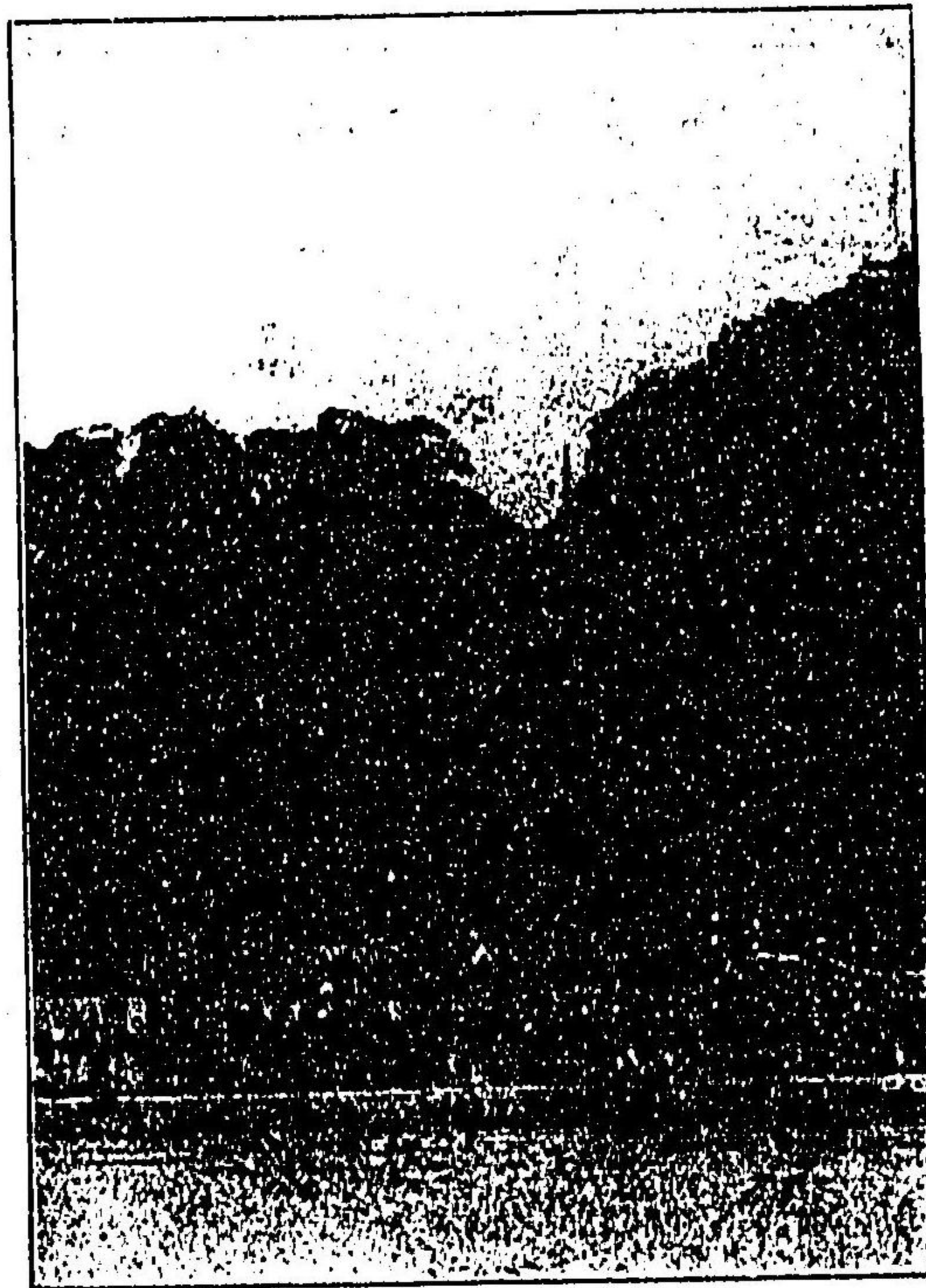
奈良大佛殿
(特別保護建造物)



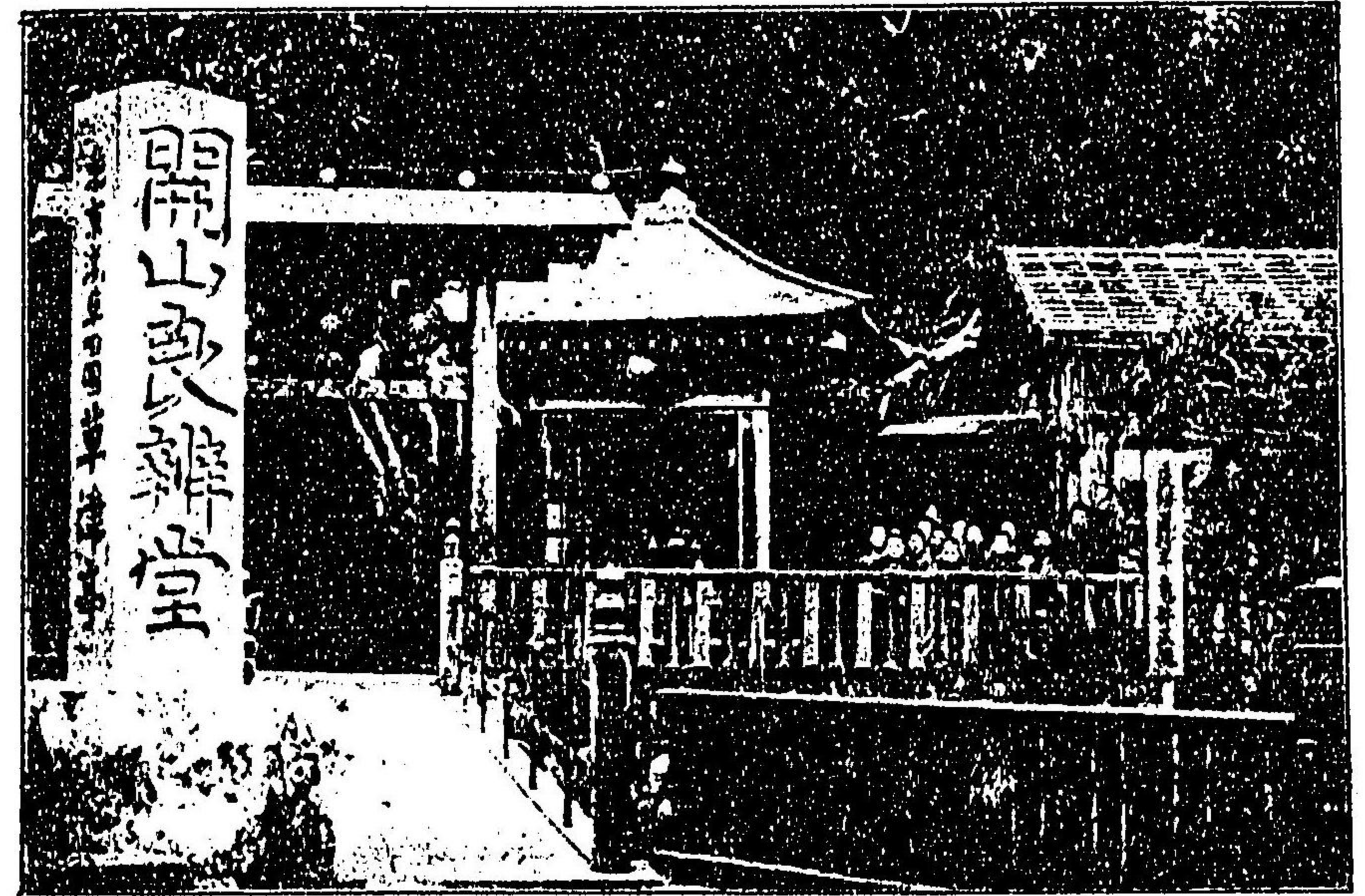
奈良大東大開山堂
(特別保護建造物)



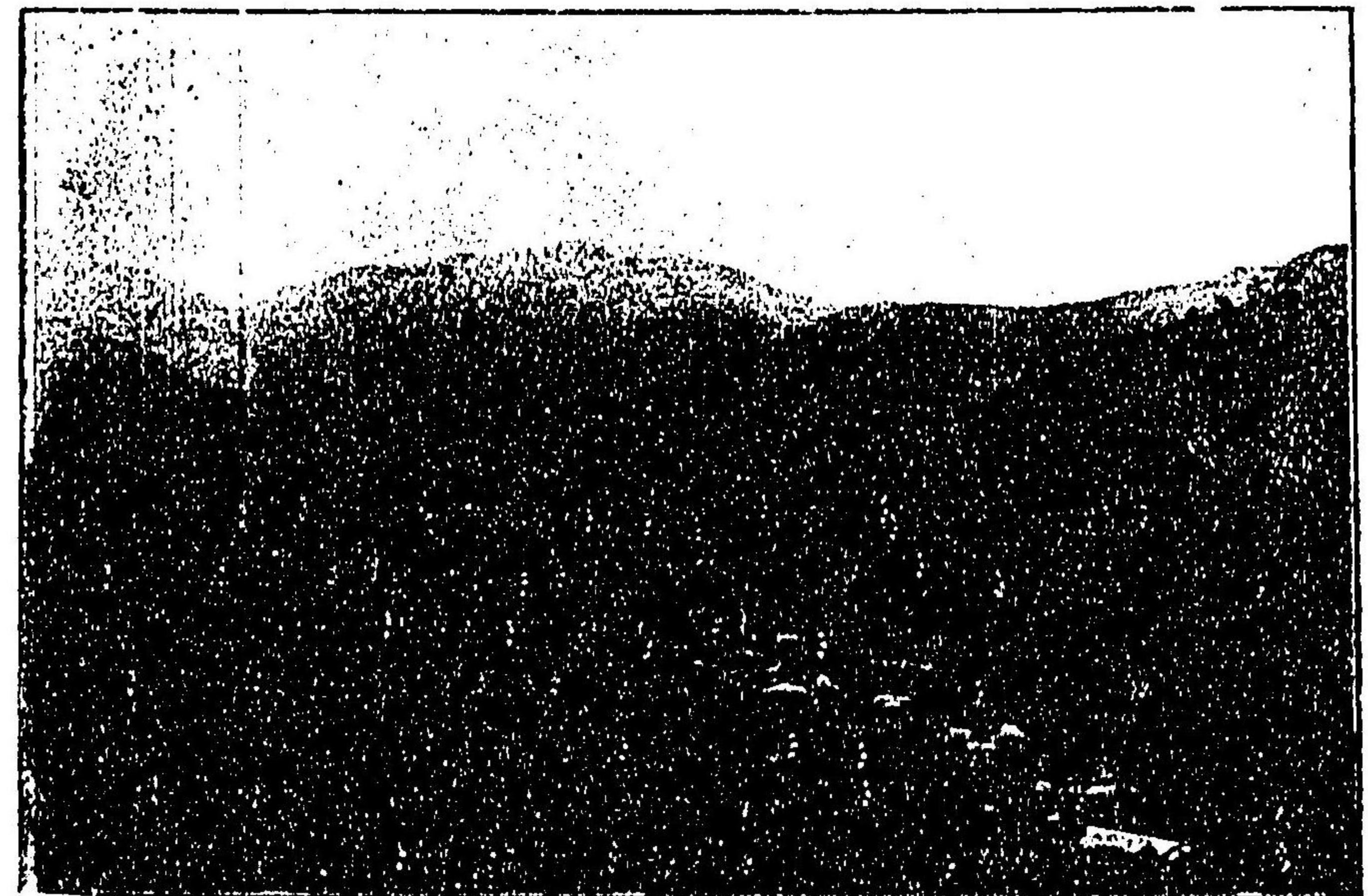
石山寺ノ景内



石山寺ノ觀月臺



大開山良辨堂



麓ノ大開山ノ全景

東大寺法華堂
執金剛神塑像



其像僧正念せられたる神像國寶



法華堂大像不空羂索觀世音菩薩 國寶乾漆製作物

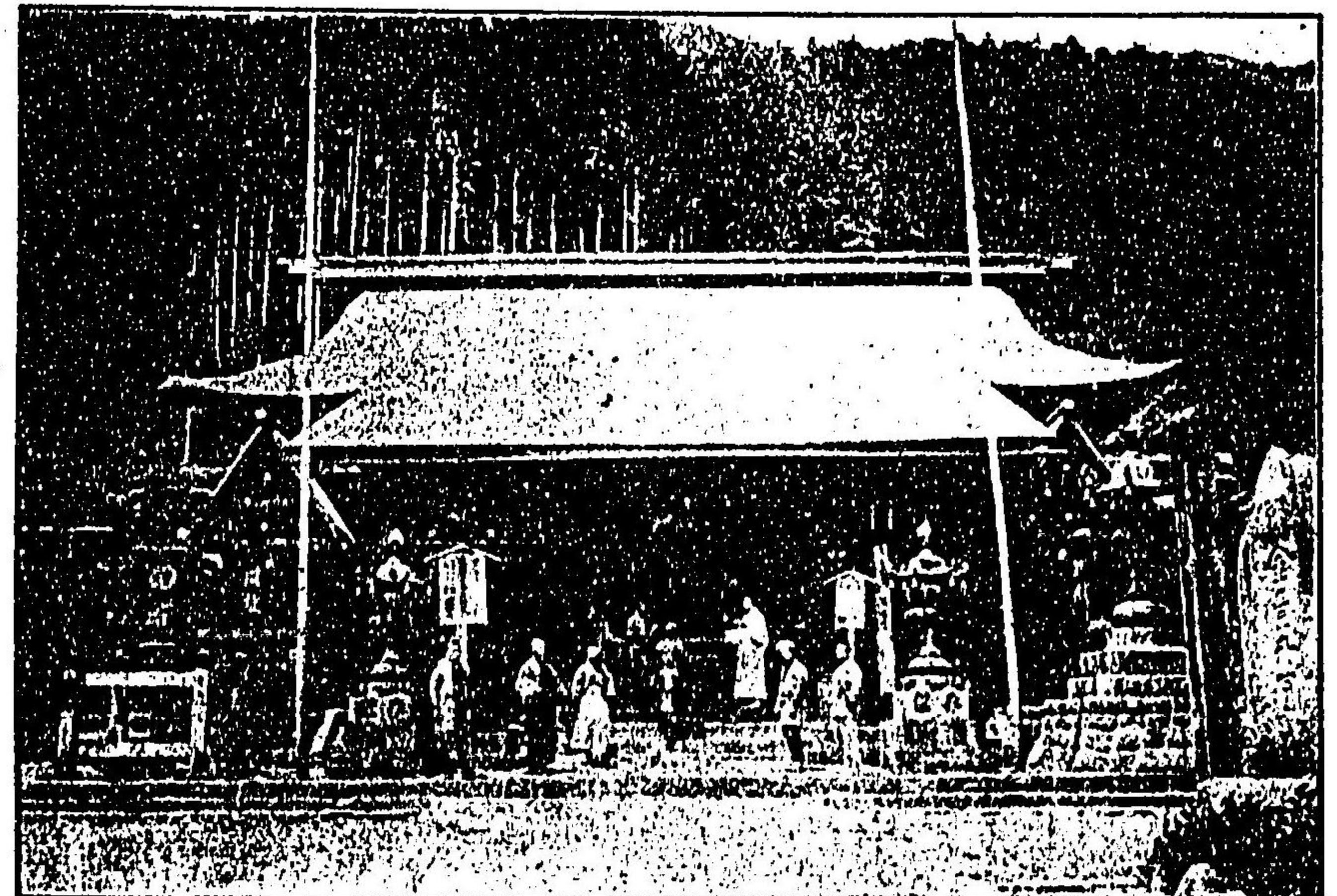


東大寺法華堂側面

特別保護建造物



頂上ノ本社ト名木兩降木

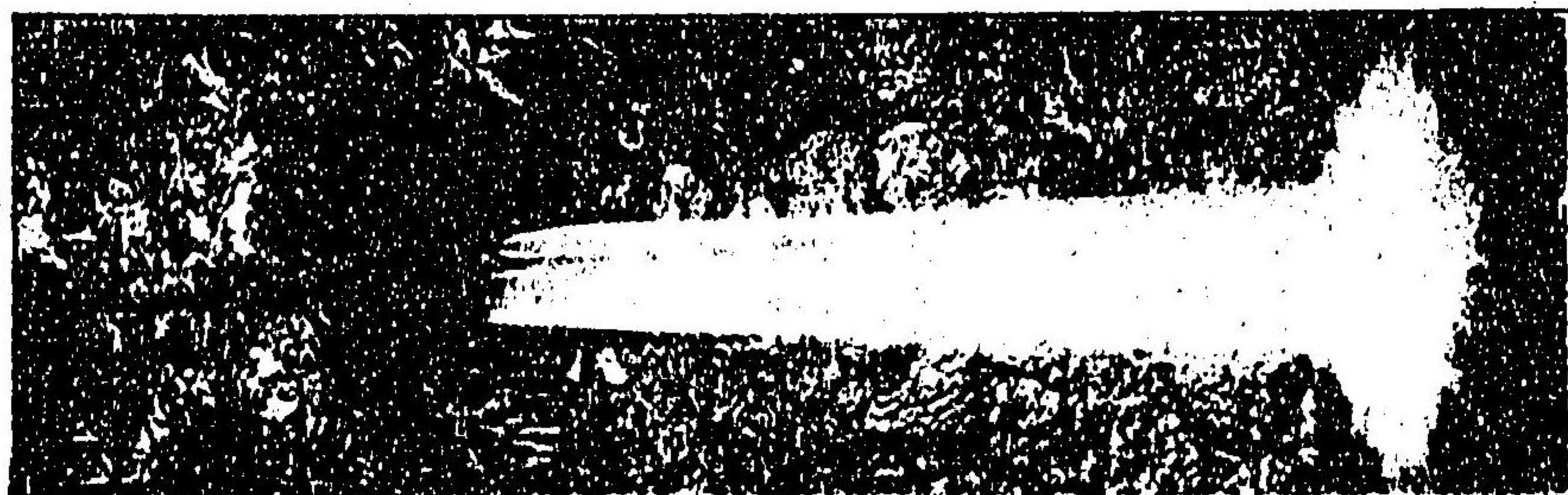


大山下ノ社

大山ノ三重瀧



大山ノ元瀧



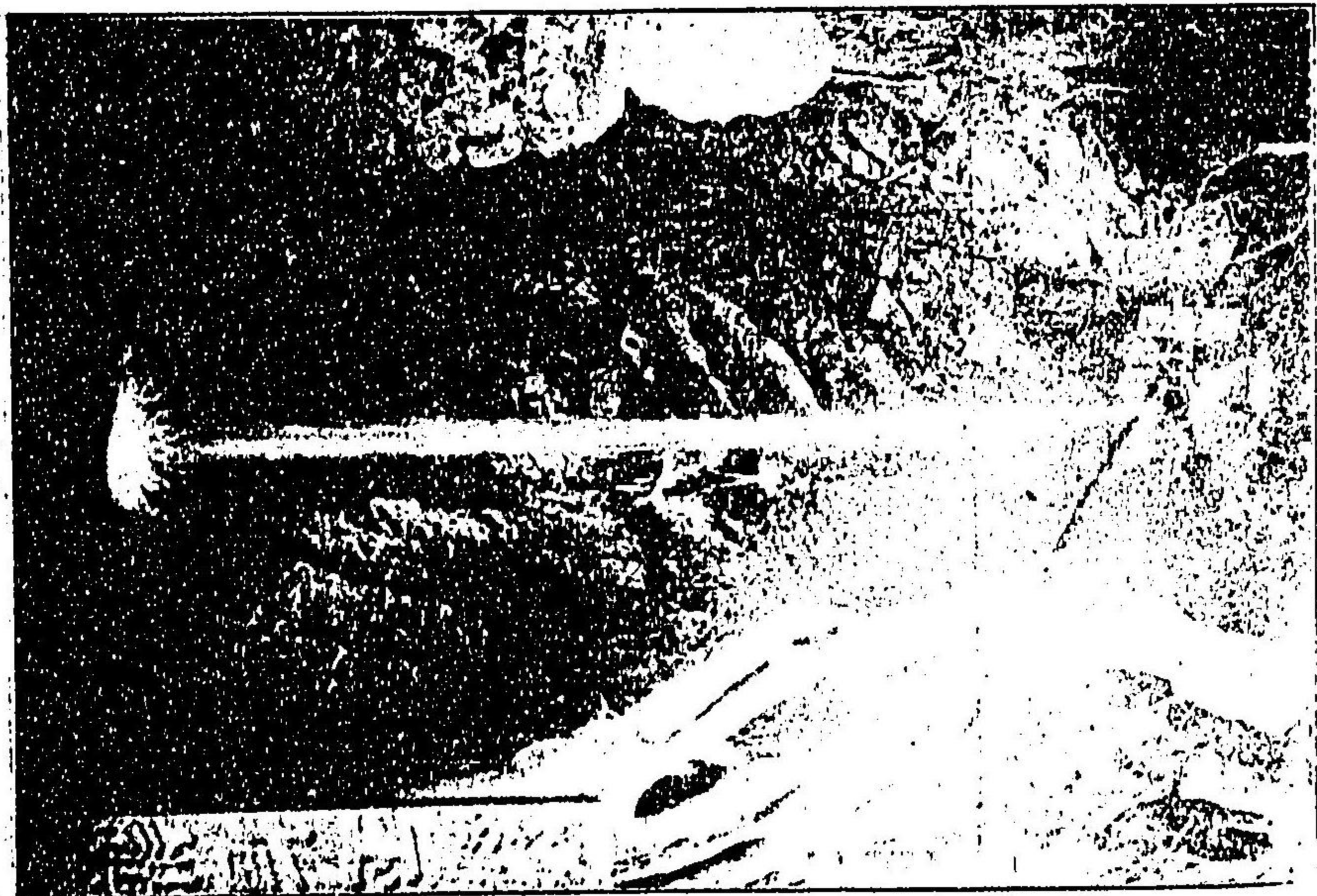
大山ノ大瀧

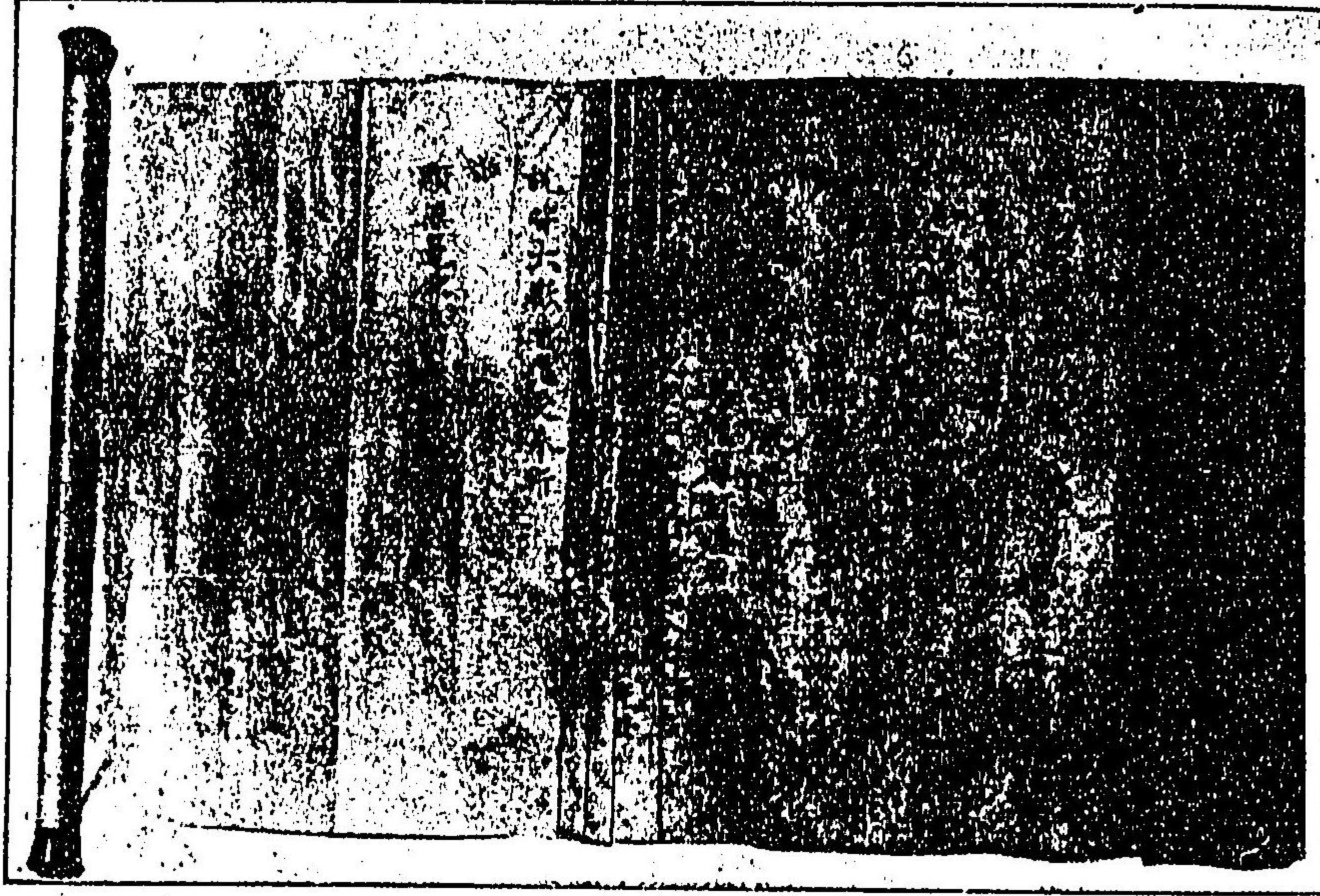


奈良東大寺良辨杉

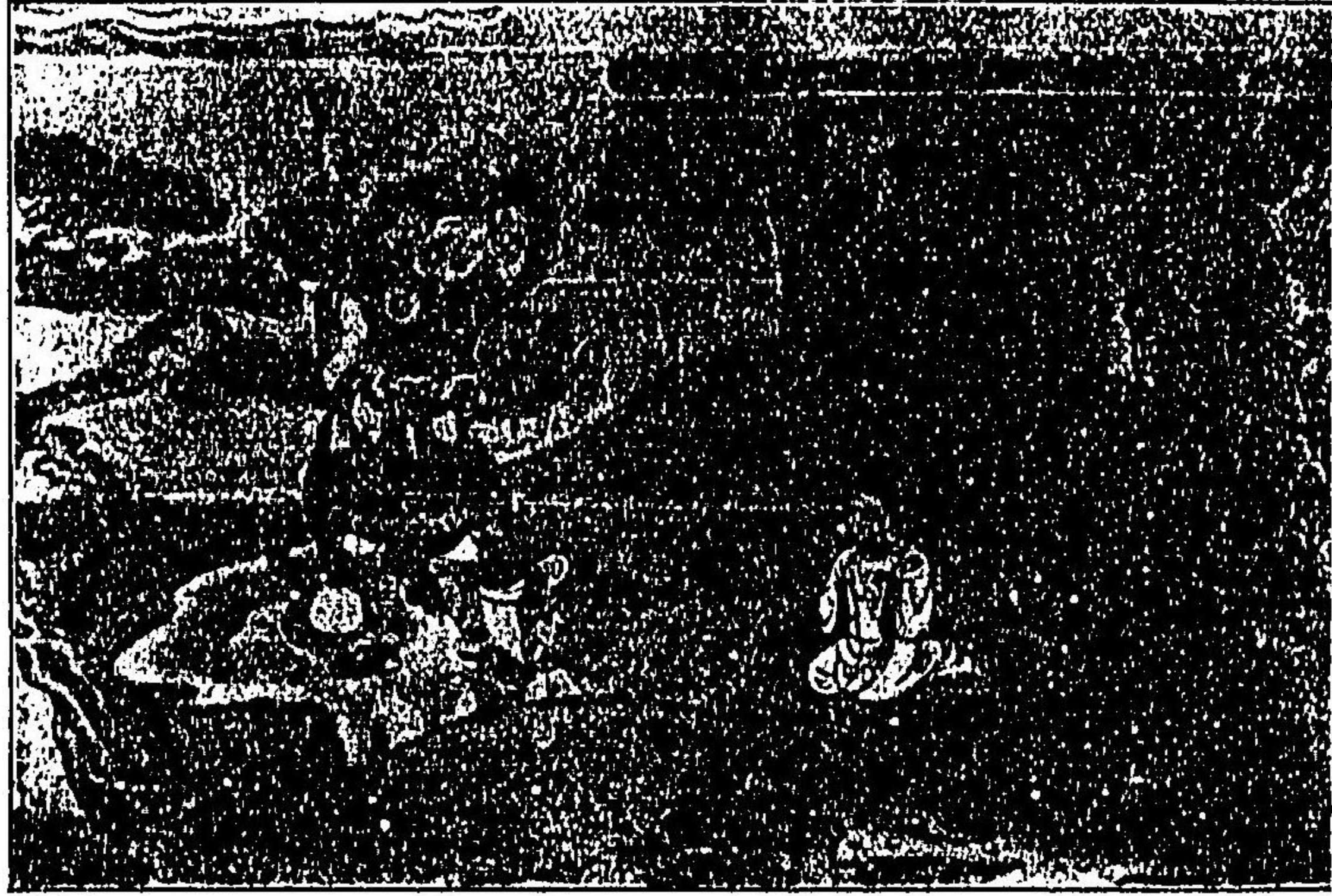


相模大山良辨瀧





(物寶寺大東)筆御正僧辨良



圖の正僧辨良中物卷繪寺大東



山雷ノ山大



堂動不ノ山大

東大寺物寶寺

自序

奈良朝は、日本佛教の精華なり。此の宗教時代に當て、靈界の権化としての、

高僧良辨僧正は出現したまひぬ。僧正は我國華嚴宗の初祖にして、夙に聖武天

皇の御業を仰かれたるもふ。聖武天皇は菩薩の大願を起し、金銅盧舍那の大佛講

を鑄造させられ、金光明四天王護國之寺を創造したまひ、而して朕三寶の奴な

りて佛前に宣たもふ。是れ蓋し華嚴經の所謂「人王を以て命となし王法を以て

身となす、世道既に和平に佛法これより始まる」この大御心なりしならん。萬

乘の王位は親ら信仰をもつて生命となし、政教一致の王法は國家の身體となし

以て私誓の報願を詔勅に換發したもふ。聖朝爲に安穩、天下爲に泰平をいたす。

絶大の信仰は雲光赫灼として、冥顯相應すと云へども、良辨僧正が森嚴なる幽

玄教理の信念をして、時代の思想に浸染せしめたるにあらざりせば、いかでが

49 8 5
内交

斯る頌業の實功を果させたもふに至らんや。茲に日本佛教の精華ともいふべき
奈良朝におゐるて、良辨僧正の徳風をもつて、時代の教界を代表したる偉業は、
今尙昭昭たり。嗚乎靈界の權化、慈尊の再誕、金鷲大菩薩と尊崇せられたる、良
辨僧正の御一代の事蹟を世に紹介せん。是を繙くもの深く宗教上の精神の
あるところを窺ひなば、時代宗教の一斑を知るこゝ得ん、以て信仰上の宣布と
もなり且つは社會風教の一端ともならんか。東京上野の邊、永昌精舎に於て東
大寺の沙門晉清之を誌す。

此の一冊は、東京の大山開山講といふ、良辨僧
正の僧者より所望せられければ、思ひのまゝ書
きたるもの、元より講員に願つゝの主意なれば、
世の一般に示すつもりにあらず。せかるゝまゝ、
順序も前後し、筆もきたなく、参考の書もなけ
れば、思ふごとく書き綴れざれども、大意をし
るすといふに止め、他日訂正してよきものにせ
んと思をのこしたり。なを足らざるところ多し
或は僧正の御徳をかゝることもあらんを恐る、
且つ昔な人のよみ安きやうにどの望みにまかせ
たり。年代は粗は順序にせしつゝもりなれど、前
後せしところもあり、幸にどかむることをやめ
よ。

良辨僧正御傳記

良辨僧正は、今を去ること千二百二十有餘年まへ、持統天皇の御世に誕生したる。其御生國は相摸の國にして、氏は漆部と申し鎌足公の後胤にして文武天皇の頃より聖武天皇の神龜のときまで、名譽ある關東八州の總追捕使をつとめ、東のが九夷の亂を平定したるところの深谷太郎大夫時忠公の子なりといふ。僧正の漆部家に生給し、因縁は、常ならぬことと申し傳おれば、之を詳かに誌さん。元來この漆部家には、睦しき夫婦の間に宿世いかなる應報にや、世を嗣ぐところの子なきため、何申分なき中にも、一つの痛嘆は忘るときもなき悲みぞありき。終には、人の力を以ては到底望む事叶はねば、神佛にすがりて、一家の相續を祈らばやと、夫婦相談したまひて、朝夕に慈悲の利益を垂れさせたまふと聞く、觀世音菩薩に心願を凝め、あはれ一子を授けたまへと祈りたまふこと

二
悲ろに、暑さ寒さの憂きも厭ひなく、年久しく、丹誠をこめたる甲斐ありて、
不思議なるかな、満願の曉には、初めて身の重きを覺えぬと。語り合せば、漆
部氏の悦び譬ふるにものなさまで力を添え、常に物憂き世と思ひしも、今は所
願の成就して、愁の眉を開くぞと祝ひ。日数月満ち目出度く、出産もいと安々
と生れたる子は、佛陀の冥加にて、玉の如き男子なりければ。夫婦は和氣一家に
満ちて、悦びを重ねて祝しこの幸福を感じたるは、偏に觀世音菩薩の慈悲な
りと、供養をすゝめをもふ。さなきだに親として子を思ふころの愛情は、古
人も申さすや、「人のおやのころはやみにあらねども、子をなもふ道にまごひ
ぬるか」と、古今に同じき父母の心の中いと深きものなるに。況んや春の夕
雪の朝、かなしみの餘り、佛に祈願をこめたまひしところの慈悲の申し兒であ
れば、荒き風にも觸れしめぬやう、温かき愛に育みをうけたまひ、日々の生ひ
たち、父の慰みと母の慈しみとをもつて、勝れたもふ。漆部家にかくも寵愛を
うけたまふ幼兒こそ、生給ぬ先より佛のゆかりある、良辨僧正の假の因縁なりし

とは夢にもしらぬこそ是非なけれ。月に村雲、花には嵐の世のたとえにもれず
漆部家の此の幸福は、いとも哀しき憂きを見たまふべきこといはなりぬべし。
傳えには、母御の園にいで、桑をとりたもふときも傍を離さぬ情けより、二
歳の幼兒を引連れて、園の樹陰に柔きもの敷き、その上に愛の嬰兒をおきたも
ふ。時しもあれ、何方よりともしれず、見るも恐ろしき金色の羽もてる荒らき
鷲の飛來る、あやしき羽音に驚きて、母御の追ひ拂わんと、我しらず大聲に叫
びをかけ給えば。何の雜作もなくあら鷲の爪に、寵兒の捉らはれて、空ら高く
飛びさるを仰ぎ見たまひ。天に追ひゆく心地して、身をのみもがき呼たもう。
高くく空に上り、西に南に將た北に翔けまわり、行く方さして氣も狂ふ、母
御は前後のわきまさえも忘れたまひて、鷲の行手を趁つゞけ、果しもなく追ひ往
き追ひ往きたまひ、そのまゝ家には歸りたまはぬといふ。
扱も鷲の荒爪に掴み去れ給し幼兒は、歡く母御と、驚く姥に隔られ。慈愛の乳
房も求め難き、遠く大和奈良の見慣ぬ山中にもち連れ。空突ばかりの大いなる

杉の木のうちろに懸られて、夜は月星の光りに眼も安からず。奇しき猿の鳴くにおそろき、鳥の聲に耳かたむけたまひては、口呱呱と啼く聲も、かするはかりなり、大鷲の今や餌食となるより外に、道のなき危きことは、風前の灯よりも切なるさまにてありき。かく思はれるも道理にて、禽獸の常として、おのが餌食の爲なねばら、なぞかこの幼兒を掴み去るべき。されども觀世音菩薩の慈悲の縁をもつて、漆部家に假りの宿りの約束にて、僧正の身を托したもふとは。露にも知らぬ俗縁の、親御は祈願をこめし申し兒なれば、生長するまで御佛の守護をうけることをたのみ、常に一寸八分の觀世音菩薩の少さなる御像を錦の袋に納め、愛兒の襟にかけたまひしなり。大悲の威神力は惡鳥毒獸も怖れ恐れて近か付かぬための徴しにてある、「此の襟掛の觀世音菩薩は奈良東大寺に現在安置したもふ」。さても漆部家の悲みは、父は家を家人に托してはるか東國に尋ね往きたまひ、母は西方にと手を別て、津々浦々の末までも、山川を辿りゆきたまひ、永き間も一日の暇とおもふまで、尋ね求めたまひしといふ。四十餘

年のその間、雨露に御身を委ね、風や寒さに足痛ても、愛でし寵兒を求めんと浮身に糞れもいとほぬまで、苦難を嘗たもふこと、實に恩愛の道ほど、人の情のせつなきものはあらざるべし。かくて恐ろしき金色の大鷲に、掴み去られたもふ幼兒は、ひと時も早く助け救ふの人なくば、やみやみと猛き鳥の害を受けたまはんとするときはなれば。天道は直ちに慈悲の使をたて、危き難を救はしめたまふぞありがたき。茲に義淵僧正となん申す、高き徳を包める智織のおはしまして。ゆくりなくも春日神社のほとりをすぎつるとき、大樹のいよく生ひ茂り、晝は暗き斗りの枝の間より、幼兒の啼く聲を聞きたもふ。おどろき待てる者をして、助け求めしめに、愛らしき二歳ばかりの男子にてありければ、且つは怪しみ且つは悦び、寺坊に召し連かへりて養育なさしめたまひしとぞ。抑この義淵と申す僧正は、いかなる聖人にてありしかといふに、大和の國高市郡市往氏の家になれたもふといへども、止んごとなき因縁にて、生れて幾許も經ず路の傍に棄れたもふ。偶ま子を求めたしとてかなしめる者のありて、日頃子の

授らんとてを觀世音菩薩に祈請してありしに。或る夜のこと、小兒の啼きこゑを聞きあやしみ戸外に出て見れば、柴垣のほとりに嬰兒あり、近づきてよく見れば香氣馥郁として普ねくあたりを薫む。これ觀世音菩薩の應化にして、常の因縁にあらずといふ。永の年月の願望を果すとて、歡ひて拾ひ上げ、養ひしに不思議にも、幾許の月日も重なるに、身丈は延びのびして、軀軀大きくなりしといふことを、畏くも宮中に聽へければ、時の帝にまします、天智天皇の尊とき御思召によりて、此の子を宮中に取上げたまひ、恐れ多くも竹の園生の皇子と共に、岡本の宮の御殿ふかく養育を受けることゝはなりぬこの嬰兒こそ義淵僧正の幼年の有様にてありき、棄子の因縁より召上げられ。忝なくも天智天皇の御子と共に、岡本の宮にいとも裕かなる御養育を蒙りしが、性れつき賢慮にして諸の事業に秀で、常に佛の道を學ぶを好むこと普通ならねば、天皇陛下には、いたく殊勝なる志に、御感をたれさせたまひ、勅して出家を命じたもふ。かくも不思議の因縁によりて、此の世においての果報は生れながらに、九重高

き慈を忝ふし、十善の王命をうけ拜して、出家なされし義淵僧正は、後の年にいたりて遠く相摸より鶯の摑み來りしところの、良辨僧正の幼兒を、奈良の春日祠のほとりに救たまへる、ゆかり深き慈悲の師匠となりたまふ。これ偏に前生よりたゞならぬ因縁とこそ思はれぬ、危き難の助けをうけたるところの幼兒としての良辨僧正は、生れの國も知らぬところの孤兒であるのみならず、親の名もしるによしなき身にてありければ、義淵僧正を見ること師僧である上になほも、一層親しき肉親のごとくおもひたまふ。かくなれば師匠の慈悲は、外弟子よりも、情ふかく愛育したもふこととはなりき。良辨僧正は今早五つの年を重ねたまうとき、始て學の道に入らしめ、文の窓奥深く進み研めよと解ささしたまへば。師僧の言葉うちまもり、只一途に聞まえさとき生れとて、理解の早きこと、俗にいふところの、一を聞て十を知るなる、稀れに世にある智者なりければ、誰れ申すとはなく、神童なりとの聞え高くなりぬ。實に旃檀は二葉よりかんばしとか、學びの道をたどり、文の林を

わけ入りたまへば、事のわきまへ次第にすゝみける。良辨僧正幼な心にも、つ
くくと思ひめくらししたもふよう、凡そ世に人と生れたるものなぞか親のなか
るべきか。我れ人間として此の世に生れながら、親といふもの求むるによしな
き身なりとは、宿世いかなる因縁にや、學ぶ佛の御教えにも、四恩の中に國王
の恩を始めとし、次にはかならず親の恩を示したまい。人として恩に酬ゆる心
なくてはかなはじと。されば恩愛ふかき兩親の、姿もしらぬあだし子の、深山
の木にかけられて、恩師に救ひを得たる身の、まことの父上は何地にまします
ものならん。産みの母御の顔拜したや、里人の兒は心おもしろく親に従ひゆく
を見つれども、たよる親なき捨小舟、いづれ出家となる身とて、親しらぬ身の
宿因は、中々に罪ふかゝるべしと。人知れず學びの窓の灯火に、かこつ涙に袖
しほりたもふこと屢なりし。良辨僧正は師匠の慰めも受け、事の道理もくみし
りたまへど、親子の情、思愛の道、などか忘れたもふときもなかるべき。なを
も心をなやまして思ひ運らすやう、もし父上のおはすを知れば、文もて安否を

問ふを得ば、いかにうれしからんものに、又父上よりは、學問もよくせよとの
たより聞く身は、いかならんなどおもひたもふもいじらしき。深山に繁る樹々
は多くあれど、ゆかりの我身にはなれ難きは、彼の一と木なれば、親の恩を忘
れざる孝道のせめての思出にぞ。彼の猿なくさいふ春日の社のほとりなる、ゆ
かりの一と木を拜しては、毎日祈りたもふやう、實の親御の世にいまさは、一
度は姿を見まらするやうと、ゆかりの一と木に涙をそゝぎたもふこともある
り。東山のなつかしきはゆかりの木あればなり、ゆかりの木戀しきは、兩
親を慕ひたもふことなれば、自から東山仙人と名乗りたもふごあるも道理とこ
そ思はへる。奇縁の結ぶところ、義淵の師僧に救助をうけ、撫育の愛を重ね來
て、かくも成長なしたりと。是を聞たる良辨僧正は、怪しみながらも金色の羽
もてる荒鷲に、もち運ばれしは事實にて、これが此の土に我あるの初めての因
縁にしあれば、その元のゆかりを忘れざらめと、自ら金鷲仙人とぞ申したまひ
き。今茲にこれを聞くだに思はずや、情のふかき産の親、よき名撰みし甲斐も

なく、師の聖より、良辨と名付けを受けけるそれ迄は。稚な名前を己が身に、し
るによしなき御身の上、朝な夕なにいかばかり、たより少く感じたまはん、推
し量るだに胸せまる心地いたさずや、さるほどに幾度か花はちりはて雪かさ
ね、隙ゆく駒の足はやみ、學びの窓に永としの、雪と螢の功をつみ、文の林を
わけ入りて、佛の灯更をふけ、早や成年となりたまふ。親しみの師は、はるは
ると遠く海をは涉りゆき、支那に名高き法の師の、智周と申す先師につき、學
びの奥義を求めたまふ。師のあらぬ其の中も、いよく勵みて教訓の遺せし言
葉をうけまもり。毎日に勉め夜に進む、智識の才を外人も、實に良辨は法壇の
棟梁ぞ、名ある譽れも顯はさん、末頼母しと同窓のものどもと、等しく賞めは
やしけるとなん。

さて、日本佛教のはじめをくわしくするにつき、この時代の有様をあらく
述べる要あるべき。抑も我國の佛教は、今を去ること千三百五十二年まへ、欽
明天皇の御代に傳へ來れるにはじまれる。その頃の我が國の慣習は、まことに

氏族の結びあるにて、時の朝政を動かしたるときなり。さまざまの説はありし
が、互に權威のあらそひにして、佛教のこのみにもあらざりき。聖德皇太
子の教えを盛んならしめたまひしより、氏族の盛衰もありつれども、推古天皇
のとき佛像を作りたてまつるにつきて、寺を構へまつるなど、ますます教えは
弘まれり。聖德太子、みづから十七章の憲法つくりたまふあり。舒明天皇の
とき、畏しこくも詔を下させられ大寺をつくらしめ給う、このあいだには、中
臣氏の權威のあらそひよりして、終に蘇我氏をほろぼしけるなど、くさくさの
こともあり。時の朝廷は、藤原氏の勢になりつれば、先祖より、神つかえする
家すじなりし、鎌足の公は、ふかく佛教に歸依したまひ。陶原の、みづからが
家をほどこして、あらためて、山科の寺をたてはじめたまふ。又その上に維摩
會となん申す、勅命の大法會を開きたまひしかば、佛教は一般にはおよばずと
も、高貴の方々みなくが、經をよみあげ、御佛にぬかつきたもふ有様となる。
鎌足公の長男の方は、出家したまひて名を定慧と申せしが、遙るく支那に學

を求め、後ち大和の多武峰「今の談山神社」を開き、僧坊を建てたもふことあり。その弟公にあたるところの、不比等公は、彼の山科寺をして、奈良の地にうつしませて寺名をあらためて、興福寺とは名付けたもふ。この寺は藤原家の氏寺とぞ定められ、祖神の天津兒屋根命は、春日の峯九かく鎮まります。これひとえに氏寺を護らせたまふ。春日神社にてある。南都に於ての三大勅會の一とかぞふる。維摩會といふ法會こそは、この興福寺につとむる儀式にして。佛教の位階はこの勅會の役をとり行ふてより、僧綱ぞといふ位の次第を定め得らるは、是非にもこの法會にかきられしこそ尊とき。されば時代は、藤原氏の勢力のさかんなることは、いよく興福寺の重きにてしられ、ますく春日神靈の尊嚴を、天下にしめしたるにて知るべし。恐れ多くもこの時の、九重たかき雲上を申し奉れば、藤原不比等公の長女にてましますは、畏こけれども、聖武天皇の御母公にしまして、大夫人宮子媛と申したてまつる。その次女にあたらせらるゝ、宮子媛の妹公は、尊とくも、聖武天皇の皇后のみくらゐにおは

す、光明皇后とあがめたてまつる。かくも空前のはまれをもつて、一門の光りを放ちつる藤原氏は、皇居の園に藤波の、いやが上にも榮へゆく、基のかたき同族の、朝廷に居ならぶ姿、隆々としてあたるべきものもなければ、氏寺の威勢も亦他にためしなかりき。茲に良辨僧正の師匠としての義淵僧正は、ふりわけ疑のそのころより、尊とき岡本宮に起きふして、慈育愛撫の聖恩をかたじけなくし、皇子の方々と温かきしたしみをうけたれば、宮闕たかく參内し、畏こきあたり侍ること屢々なり。終には侍講をつとめ、道を奏しまるらせたりてまつるなど、時には優渥なる御掟もうけたまはりぬ。道徳はすぐれ學問の深き名聲は朝野にひびき、文武の官人ひとしく敬まひ歸依したりとなん。さきには、時代のあらゝを述べつれども、今は各宗の次第をかたるべし。通俗の世人一般はかくも思はんか、唯に佛教としいへば、多くは天台宗とか眞言宗ぞと申せば、尤も古えの宗旨なりと覺悟すべきも。そは僻ことにして、其前々よ、はや法相宗もあり、華嚴宗なんぞもありつることを、知れるものいと

稀なるべし。偶くその名を聞しるといへども、佛教といふ道を、専らきわむる人々の學ぶべきものにして、夫れ等宗名の寺あるべからざと信んず。まして其の大本山をぞ申す、伽藍をなへし擗えのあるべきやうなしと。されば、古えは弘法大師の開きたもふ、眞言宗をぞか、あるは傳教大師のはじめたもふ、天台宗が、はじめなるべしとおもふ。これ等二宗の起りは、桓武天皇このかたにして、即ち平安朝のときの佛教にてぞある。その前には、奈良朝の佛教あることを忘るべからず。奈良朝の佛教は、平安朝の佛教の親たるべく、鎌倉武門時代の佛教を云はんとするものは、必ち平安朝の佛教を呼ぶならん。平安の佛教は、奈良の佛教をたづねざるべからず。誰人もしるべく奈良の佛教は、その旺盛の頂點なりしことを、青丹よし奈良の都は咲く花の、匂ふが如く今盛なり」と、謳はれた時である、その盛を極めたりし時、日本佛教の大部分を双掌に握るはその高僧ありき。偉大なる智識として、名聲いよく高きところの藤原氏の氏寺、興福寺に出でたまひしところの、義淵僧正こそ其の人なり。奈良朝のとき、いと盛

んを極めたりし佛教は、其の後代に諸宗へ種子をわかち蒔きたるにおなじ、その教えの傳へたるは、實に義淵僧正にてある。僧正の弟子あまたある中にも、秀才偉傑の上足と申しけるは七人ありし、蘭菊互に研を競るとても申べき、學徳ならびそなへし方々なれば、枝葉はみな榮をさわめたり。日本佛教の源流は、傑僧とあがむべき義淵僧正に歸すと認めてよかるべし、上足七人各の御名を申せば、立坊僧正、行基菩薩、良辨僧正、道慈律師、宣教大徳、良敏大徳、隆尊大徳等をいふ、その外には行達大徳、神叡大徳も亦其弟子にてありしなり。立坊僧正は海波の上を涉りて、遠く學を支那にもとめ、婆羅門僧正といふ印度僧と、道律師といふ支那僧等と、共に歸朝して名聲をあけたる智識なり。一代の間竹杖と草鞋とに身を托し、山野を開墾して民業を助け給ひ、後良辨僧正の勧めたてまつりし、大佛の勸進に竭したまへる、事業家としての行基菩薩あり。英才の聲高く、師僧に繼ぐところの帝師を命ぜられ、ますく御親任を忝し、東大寺を開き終へて、なほ華嚴圓宗の開祖となりたる、良辨僧正あり。法相の宗系を正

しく守りたる、學者の名著しき、宣教大徳もある。その外、智富才秀の名僧が、林の如くに顯はれたり。師の恩徳を賞めたる、えられたる義淵僧正は、佛陀の祭事をおさむべきためには、結縁の道場を起し、壯んに大なる寺院を建立したまひ。道俗を度し勸める經營としては、龍門寺とか龍福寺など、俗にいふところの五箇の龍寺を構え起したまひき。自ら建立したまひし龍門寺に久く住せられたため、世に龍門の義淵とぞ呼びしことあり。この龍門寺といふに有名なる龍門瀧ありければ、古えより歌人などの此處に詣てたるものおし、吟詠歌集にさはなり、伊勢家集といふ文に「やまとに三月はかりすむにさうくしく寺めぐりせむと思ひてありきけるにりうもむといふ寺にまうて、む月の十日あまりになんありける、見ればそのたうのありさま、瀧は雲の中よりおちくるやうに見ゆ仙のいはやといふは、いたく年つもりていはのうへのこけ、やへむしたり、あはれにたうとくおぼへて涙おつるたきにおとらず云々」と見へたり、今は千年の久しきとし経りて、大和の宇陀郡にそのあとをのみのかす。一代學者

として著明なるのみならず、事業の上にも、徳化の功も、ならび舉たまへる、義淵僧正の技倆のそなはれることは、弟子等の中に碩學あり開宗の英傑あり事業家も道徳家もあるは、師僧教訓の功力のおもかけの、いとも尊とくおもわれぬ。各々、傑たちが讃嘆するところの聲にとりかこまれたる、權化としての師僧義淵僧正は、觀世音菩薩の化現と崇めたてまつり、救世のちかひいと深く、その徳風は四隣に蕪じたりける。

まことに我が佛教の法水は、源流茲に起りたり、義淵僧正一の代の教泉は、たえて日本佛教の末流を示し、弟子の道慈律師の末弟には、眞言宗を開きしところの弘法大師あらはれぬ。隆尊僧都の弟子よりは、天台宗を興せし傳教大師のあらわれたり。下だりて鎌倉の武門時代をいへば、天台宗の法流を汲みたる法然上人は、淨土念佛宗を開きそめ。比叡の峯月高く、横川の水は限りなき法水をぞぎ、淨土門よりは更に親鸞上人の一向眞宗を顯はしめたり。日蓮上人にいたつては、奈良の古學を探ね、四明の林にわけ入りて一派の宗旨をひらきた

り。かくも教界の諸流を示し擧ぐれば、皆々奈良朝の根源に基ひしおわんぬ。其の源泉の涌くところ義淵僧正の一身に歸すといふは、ゆるなき言にあらざるべし。弟子良辨僧正と師匠とは、特別なる親縁なる間柄なること勿論なれども、弟子中にあつても行基菩薩とは、大佛殿造立に付て、親しき因縁いとも淺からぬ關係にてありし。さても義淵僧正は宮室の御信任いとも深くうけたまひ、畏くも文武天皇よりは齊料として、稻壹萬束を下したもふ。夫れのみならずその後ち、重ねて優渥なる詔りを聖武天皇よりうけたまへり。神龜四年の詔勅に曰く「先帝の御世より朕が代にいたるまで、内裏に供奉して、一の咎めなし、念ふに年とともに徳たかし、よろしく市往氏をあらためて、岡の連をたもふ」と智識の効をほめたまひ、その徳化の實を賞したもふ。かくもありがたき大御言をうけ、特に資格を下しおかせらる、一代の名譽光彩まはやくぞ思はれぬ。この義淵僧正が親く宮中に仕奉て六十五年の間、天智天皇このかた、天武、持統、文武、元明、元正より、聖武天皇の御世にいたるまで、七代帝王の師表として、徳

風を崇め敬ひの禮をうけたもふことは、教界にも稀なる高僧にてありき。久しく佛教の棟梁なりと、貴賤ともに等しく仰ぎ重ぜらる。神龜五年十月と申せば良辨僧正の御歳四十年のときに、哀しくも因縁深き師匠であるところの義淵僧正は入滅したもふ。其時聖武天皇陛下におかせられては、いたく御愁歎あらせたまひ。夫れがため治部の官人を御つかはし遊ばされ、喪のことを監護をさしめたまふ。又勅して絶一百匹、絲二百純、綿三百屯、布三百端を下したもふの光榮を得たりき。これぞ義淵僧正のたうとき最後のほまれにてありし。茲に肉親の親がはりなる恩師にわかれてより、慈悲の深縁をうけたる良辨僧正は、これより漸く光明を照し初る基とはなりしなり。良辨僧正は山澤深くわけ入りて、神境に遊び、淨き法行をみがきたまひ、朝夕讀經の聲いやたかく、みづから山を身をかくし徳をつゝみ、深山がくれの行者として、久しく世にその名の聞へなかりし、獨居の仙人となりたまふ。これぞ東山仙人とか金鐘行者とかの別名ある時代にてありける。

濁りの世に遠ざかり、仙人として山こもりたもふ良辨僧正は、鬱蒼と茂る大樹の下に、草の菴の内に、いとも淨けき修法をつとめたまふ。その姿の氣高きことは、樹の下、石の上、見るからに清き白衣をめし、塵の世遠き林の中、さながら神仙のごとく見ゆ。この金鷲仙人のつかへます、化現の神を執金剛神とまうす。この神は、彌勒慈尊の淨土にて、都率の内院といふところの、天人等の影向を、うけたまふ前面守護の神にして、現在の身には哀愍をたれたまひ、當來の世には一切の障を拂ふといふ。大悲の誓ひいと深かき、觀世音菩薩の化現にてましますなり。彌勒菩薩の化誕なる、良辨僧正の幼身なりければ、今この神像にむかひたまひて、懇ろなる誓ひをこむ。契る修因の法の花、いかでか妙果の匂はざる、尊とき修行は、金光明最勝王經を、聲たかくに讀み上げたもふ。遙かに西にむかひ、皇居の方を伏しおがみ、金輪聖王、天長地久、御願圓満と唱えたもふ。其の聲は神妙に徹りたりけん、金光明は天空に感じ、奇瑞は九重高き奥に響きぬ。執金剛神の頂より發こる金色の光明は、宮中にての殿上

殿下の噂どりに、恐れ多くも、聖上の大御心を動かしたてまつる。事の仔細を東山に探り來るべくやう大命を下したまふ。勅使はかしくみて、縁りしたる樹々の中、晝を暗き山路をわけ入り、いたり見れば、白衣の仙人石に座し何事かを神像にねぎおるさま、げに神仙遊化の境界とも見うけられし。勅使は仙人にむかひ、我れはこれ聖武天皇の御沙汰をうけ、金色の光明のあり所を尋ぬるもの、又汝のつかへまつる神は何といふ神なるや、又何ゆへにかゝる所に修行するやと、白衣の仙人に問を下したまふ。良辨僧正としての金鷲仙人は謹しむ答えたまうやう、神像は慈悲の化現の妙体にして、執金剛神とまうしはべる。臣僧の名は金鷲仙人と申し、いま邦家のため、茲に安泰を祈るもの。讀み上げたてまつるは、金光明最勝王經とまうす、只管聖上陛下の壽算長久を護らんとして、祈るところは皇統のますくさかえまし、天下いよく繁昌なさしめんためなり。希くは永久に祈願を護持すべきところの一字の堂舎の建立しまさんことを、恐れながら祈願したてまつるなりと、まことに臣僧の愚願

が、畏こくも天聽に達し、態々御勅使の、御差遣をうけはべるとは、恐縮のいたりなりと謝したもふ。勅使は仔細の答へを聞終へて、事のなり始末を、具さにきこえあげければ、聖武天皇には、深く叡感をたれさせたまひ、忝けなくも天平五年(千七百七十六年前)に、この金鷲仙人の善願を容れさせられ、大和國は添上郡に、羅縹院といふ、今の法華堂(俗に三月堂といふ)を、其の修行の場所に造營しめたまひ、下賜の光榮を得たりき。この堂宇を金堂として、初めて金鐘寺と申したりし。今の奈良東大寺の根本の堂にして、其まゝ現存しおるもめでたし。又た優渥なる官符の御沙汰をならびうけ、齋料として、糧食の恩賜を拜受したまひき。

瑞雲のありしといふ、殊勝の靈地、金鷲仙人の修行所には、興隆佛法の道場の措え出来あがり、徳は萬乗の帝威によつて、金鐘寺といふ伽藍はなり上りぬ。聖朝安禪の法の聲はかざられ、寶祚福壽の法儀は、ますく勵けましければ、萬乗の御車を、このところに托けさせたもふこと歴なり。又た宮中に參内して、法香

を九重の奥に敷く、まことに良辨僧正の四十五歳の春は、恩賜勅建の堂を見たてまつる。供佛誦經の徳たかく、至尊の崇敬は、いよく深くありければ、時の人皆な徳になつき、貴族は隨喜の信をさづけ、老幼は渴仰して、金鷲大菩薩とまうしたりき。これにても、久しく光りを蒞み、身を隠くし、世に知られざれしを思ふべきなり。上は、今上天皇陛下の御崇敬をかたじけなふし、下は、老若男女等しく信仰の本尊となりたもふ。金鷲大菩薩の良辨僧正は、その徳風天下になびきわたりける。

佛教の中心でありし、一大棟梁の義淵僧正、良辨僧正の師僧は入滅されてより弟子等は、懇ろに裴をつとめ、恭しく忌服のつゝしみをまもりけるが、忌は開き、服は去り、各々腕をふるひ、力をあらそう時とはなりぬ。或は都門に教導の旗を上げ、布教を實踐するもあれば、或は學風の興隆をはかり、唐僧と往來するもある時代にてありし。同門のうちにも前にのべたるがごとく行基菩薩は、良辨僧正と密接なる關係ある方はなかるべき、尤も親しき因縁は、後年に

いたつて良辨僧正の勸奏したてまつる、東大寺の建立、すなはち大佛銅像を造りたもふとときに、行基菩薩は大勸進として、將又勅命の使者として、伊勢大廟に參籠し或は國分寺創建のこと、實に良辨僧正の傳記中に、隠れもなき親縁をむすびたまふ。(このことは後らに詳かにせん)。然れども、今この時代においての行基菩薩は、専ら天下いたるところに、社會事業を興し、慈善の土木經營をつとめ、足にまかせて諸國を巡行し、事業をあげたまひて、私く世を度し民を助けたまふ時なりき。其内にも五畿内中にて、寺を開かれたること四十九箇所、布施屋を建てたること九ヶ所、船とまりを造ること二箇所、橋を架したること六箇所、河を堀り、水利を計りたること四箇所、池を堀り、耕作を助けること十四箇所、堤を作りて、水難を防ぎたること貳拾箇所等の、弘く洪益をはかり、以て萬民を救ふためには、ひたすら寺を興し、堂を建て、一身を宗教の業に委ねたまふたときなりしなり。大和に於ては菅原の喜光寺を開基したまひて、入滅の居住と定めたまふ。又は長谷寺を創建して、本願の誓ひを終へ

たもふあり。山城に於ては、人民の便を計りて山崎の架橋をはじめ、西芳寺を建立したもふあり。又攝津に於ては、伊丹に昆陽寺を興し、猪名野笹原の、野原を越えて、六甲、武庫、二山の奥に踏み入れては、終に有馬八部の山中に、温泉を發見したまひぬ。天下に今なほ有名なる、有馬温泉を開きては、常喜山温泉寺を創立して、病者に浴泉の効を教ゆるなど、席暖なるに暇なきほど、事業經營に盡力なされたる時なりしなり。玄昉僧正は、義淵僧正の弟子中の偉傑なれども、良辨僧正にとつては、直接に行基菩薩その如く、親縁の間柄にてはあらずし。然れども、間接には忘れざる因縁を付與したる方にてある、良辨僧正の聖武天皇に勸奏したる曉には、大佛尊像開眼供養の盛典を擧ぐる時、開眼の大導師として、重役を勤められたる印度の僧、菩提仙那(婆羅門僧正)といふ高僧と、又た数年の後には、良辨僧正の大發願なし玉ふどころの、大方廣佛華嚴經といふ、聖經を、支那より齎し來りたる、唐僧道律師とは、玄昉僧正の支那遊學の歸路のとき、海上同船の二百五十人一行のうちにてありき。

華嚴宗の高祖と仰ぐ、賢首大師といふ唐僧より、教學を稟けたところの俊傑なる慈訓僧都は、實に玄昉僧正の弟子にてあるぞ不思議なれ。良辨僧正は賢首大師の孫弟子となりたまうて、一乘圓教の華嚴宗を開らきたまひける。後ち天平八年(千七百七十九年前)には、印度僧である婆羅門僧正は、唐僧の道璣律師と共に筑紫の太宰府に寄港して、今や攝津の難波にむかはんとするときなり。其の頃の航海は、頗る難事にてありしことは、此の玄昉僧正一行の船が、波海上にあること、實に十九年の久しき日子を費して、漸く、山青く、水清き、我が故郷の地に着したもふこととなりしなり。茲に良辨僧正は、佛縁日々に進み經法の理解増々高遠なるを感じることに、梵僧とか、唐僧とかの、來朝する毎に我邦に幽理の經文は渡り來ると雖ども、佛教修行の三學の一たる、戒律の、未だ我國に傳え來るものなきことを、深く歎きたまひ、宮闕に伏奏して、佛日増々法縁を重ね、冥暗を照すこと皇國の進運、今や誠に目出度しと云ふべし。さりながら護法の根本、諸善の原因たる傳律の戒法なきは、末世のどもがら聖教

を傷け、邪行の恐れあらんか。依て支那の揚州に、龍興寺といふ精舎にある、高僧鑒眞といふ大和尚のいますと聞く、希くは彼の大和尚を招聘して、戒學の道場を設けたまはゞ、大乘の佛教國として、かくるところなきを得んかと。聖武天皇はこの、良辨僧正の懇ろなる求願を聞召したまひ、勅許して、良辨僧正に入唐してもつて、彼の鑒眞大和尚を招聘せよとの、大命を下したもふ。良辨僧正は、勸奏して天皇の聽を得たるは、木望には相違なかりけれども、元來戒律宗の興隆を、目的とするは本分にあらざりしかば、固く辭して命に應ぜざりき、依て大安寺の學僧なりしところの、榮叡と、普照とに、勅命を下したもふこととなりき。後ち履難波を凌ぎて、龍興寺の大和尚は、傳律の師として、我國に到着したり。されば、上は天皇陛下に、菩薩戒を授けたてまつり。大佛殿前に於て、新たに戒壇を築きたまひて、授戒の大典を執行したるとき、戒師は、この鑑眞和尚、即ち、過悔大師にてありしなり。斯のごとく、この時代に於いての高僧の方々、智識のそろふたるときであり。印度僧は來り、支那僧は

渡り、皆を良辨僧正が、他日空前の佛教界における、大事業を興すの因縁を、一増深く助けたもふべき、機運の成熟せしむることを、促したるかのことと思はへるなり。

信仰世界の、標目とも見做されたもふ、良辨僧正は、去る月日の移り往く、四十有餘の星霜は、只管、心界の三昧に入りたまひ、穢れたる塵の世にある人慾の我を忘れたもふたのである。佛陀の靈應は、この權化の菩薩をして、眞實の覺りを証せしめたもふ。一と夜、良辨僧正は、靈佛の威徳を感じたまひぬ。聖武天皇より勅造して、下賜の御惠をうけたまひし、金鐘寺の本尊は、良辨僧正の自から造像したてまりたる、乾漆の不空羅素觀世音菩薩にてありければ、一般衆生の爲に、祈願したまひしに、一乘圓教の華嚴の大寶典は、道瓏律師の手によつて、遠く波上を越えて、支那より渡來すれども、章を開き、科を分ち、尊とき此の大經を、講じ示すところの人器なきを、歎き祈願をこめたまふ。懇ろに告げていはく、華嚴の妙典、我が地に縁を敷くといへども、未だ開經の機縁

熟しがたし、何とぞ聖僧權者の來り示すを願ふと。佛陀の冥示にいはく、此地に聖經の來るは、嚴智の權者あるが故なり。汝往て探り尋ねよとある、悦びて、搜索にとりかゝりぬ。此處に、元興寺といふ精舎に、嚴智といふ智識のありければ、早速門を叩き、膝を屈して、日頃の所願を訴えける。良辨僧正の請願を聞きたる、嚴智は答ていふやう、我れ名は、實に汝が欲する嚴智とは申せども、悲むべし五教十宗の大典を開くべき、華嚴の智者にてはおわさすといふ。良辨僧正の希望は、あえなきこの答に、失望の色をあらはし、願くは、眞の嚴智の方のいますところを知らば、何とぞ教えを垂れたまへと迫りたり。大安寺の學寮に、唐僧の學匠あり、審祥大徳といふもの、彼れは眞實の權智なるべきなりといふを聞く。良辨僧正は、再び大安寺にいたり、親しく審祥大徳に遭ふ、學窓香り深くして、十丈の徳風、自かち備はる、六相の妙は、法の袖に薰んず、得安からざる、眞の嚴智なりければ、求願のやむなきを、請ふこといとも懇ろなりけれど、審祥大徳は、龍象林の如き時代なれば、固く辞して請

ひを容れたまわすといふ。良辨僧正は、法相の學窓をいで、久しく圓教の華嚴を求むること切なるに、今此の聖經を獲て、開講の實の擧げかたきを歎きしに、其の師ありて、未だ許されざるを悲み、終に宮闕に伏奏して、勅命をもつて、審祥大徳にむかつて志願を容んことを請ふ。天皇陛下は、良辨僧正の請を許したまひ、審祥大徳も、大命の終に辞しがたきを慮り、御命に服受したりける。良辨僧正の日頃の大願は成就したり。

天平十二年(千八百八十三年前)十月八日は、佛敎の根本法義として華嚴宗、如來の本懷を説きたまひし、事々無碍の法説は、我國に初めて、産聲をあけたるべきにてありき。初日、先づ高山を照しはじめの、華嚴の光り、方廣の明德、實に前代未聞の法縁は、良辨僧正によつて、我國に結ぶことゝなれるぞ、有難き。畏れども、聖武天皇陛下には、年のかずくを重ねさせられ、恰も當年は、御聖壽の四十にわたらせたまひ、天長の壽算四十滿賀を祝したてまつるときにである。日頃御崇敬をうけまつる、良辨僧正には鎮護國家のため、佛陀の

靈徳にねぎことを、奉る身にとりて、慶賀の實をさしげざらん、寶祚の長久を祈る、御願をこめて、華嚴大寶典の開講をあけ、一は國家の隆運を祈り、一は紀念の開宗とぞ定めたもふ。この事は天皇陛下の尤も大御心に叶はせられ、空前の華嚴開宗の法筵に、叡感をたれたまひき、かゝる盛事に勅命を拜したる、大安寸の審祥大徳は、開講の正師といふ大任をもつて、美々しき道場にのぞむ、其の外、帝都の名僧等、復師の勅命をうくるもの、十六名にして、隨喜の叢雲のことくに集まる、金鐘道場は、威儀整然として、嚴かなる莊飾をもつて守られたり、此の日は、一天朗かに晴れわたり、東方の峯には、常に瑞氣たち、紫の雲はたなびき亘る。天皇、皇后、兩陛下には、正装にして肅々と臨場あそばさせられ、いと尊とく拜しまつる。親王、公卿をはじめ、文武の百官は、禮装をもつて法筵に整座したりき。開講の祈願主として、良辨僧正は法筵を掌る、列星の如き、十六の名僧智識は、花を散らし、香を供へ、佛威をかざる、靈妙の道場において、今すでに幽玄の六十卷、華嚴の法典はひもときそめぬ。其の盛

観なること、佛界の實現かと思われたり。二十卷の黄卷は講おへて、毎年講をかさね、一部の大典は、三ヶ年の歳月を経て、めでたく六十卷の講をおさめ、開宗の實と共に、經講の式は畢りを告げたりき。この間奇瑞ははく顯はれ、靈驗を重ねければ、天皇陛下には叙感なよめならず、彩帛壹千餘疋を、僧に施したまふことあり、親しく感賞の詔を下したまふ。又の勅にいはいはく、一般の寺院は、華嚴經をもととして、一切經を必ず轉讀すべし、經講をつとむべしとの聖令にてありしなり、これよりは佛敎界中に、はじめて東天より、日輪の照らすかごとく、ますく繁昌をきはめ、如來初轉の根本法輪は開かれ、こゝにめでたく華嚴宗の開宗をつく。さきに良辨僧正のために下しおかれたる金鐘道場は、我國に華嚴宗を開く根本の道場となり、皇統の隆盛を祈るところの堂に今上陛下の四十御滿賀の法筵をひらく。聖武天皇の御滿足は良辨僧正祈願の成就となり。良辨僧正の上奏したてまつることは、天皇陛下の御嘉納あらせられざるはなし。これによつて良辨僧正の勸めたてまつる事は、天皇陛下の宏大なる

御偉業としてあらはれ、隨て良辨僧正の名徳はいよく世にあらはれることとなる。これは宿世のちぎりいとも深きゆえなりと、僧綱補任とか。その他に東大寺要録の文をもつて、次にのべることとせむ。

良辨僧正として生を相模の國にうつし、時忠の子といふ名のもとに、漆部家に産れたまひしが、先の世には、印度の修行する僧なりける、ある時法を求めんとて、舍衛國といふ所に往かんとして、流沙河とて水の多き河にいたり、渡る賃録なき修行僧にてあれば、空しく月日を重ねとまりたまふ。こゝに畏こくも聖武天皇陛下は、生を我が文武天皇の皇子として、藤原宮子媛の御体をかりて、御生誕あらせたまふ。先の世にては、印度流沙河の船師にてありける、よつて河を渡らんとして、賃録なき修行僧を惘然におぼしめし無錢にして河を渡らしめたまふ。彼の修行者の歡び、たとふるにもなく、求法の使ひたすくる功德廣大なり、報恩のために船師の幸福をいのり、來世はかならず、國王に生れたまはんと誓ふ。次の世にて再び遭ひ見るべしと云ひて、彼岸にて袂をわかち

ける。此の善因によつて日本國の帝王と生をうけ、十善の王位をうけたまふ。彼の修行僧でありしところの良辨僧正、此の土に再會したまふことは、前生の宿縁にてありける。しかるに良辨僧正つらく思ひはかりたまふやう。聖武今上陛下におかせられては、前生の福因めぐり來て、最も勝れたる徳果を獲たまひぬ。今や至尊のたかみくらに御つき遊さるゝこと、いとも貴きことには相違なかりけれども、現世の福德は、一生の娛樂にすぎず。來世の良因にあらねば、若も後の生にいたつて、やみく／＼苦患の種因を醸すともならはまことに甲斐なき今世となる。何卒伽藍を建て、佛を造り、經を讀み又は寫し、弘く慈悲の善因を植へ、生民を救済たまひて、菩提の資料となし、且つは現世の福業を進めたまふべくやう、畏みて奏したてまつる。前生宿因の淺からぬころより、良辨僧正の赤誠をもつて勸めあげければ、慈心に富ませらるゝ、聖武天皇は深く尊慮をかたむけたまひぬ。篤く幽冥に感じたまふと共に、顯界にある天位の歴代をおもほしめたまふやう。佛法のはじめて傳はりしより、百七十

餘年におよび、位を重ねること十六代、聖德太子は申すにおよばず、その他の歴代の方々は皆信佛の勝縁をうゑたまふやう、天智天皇の佛業はそのはじめにてある、別殿のうちに丈六の釋迦像を奉安したまひて、百濟大寺を建てたまふ。一夜親しく佛前に勤めたまひしに。夜五更のとき、二天女の降り來て佛を禮しおはつて、天智天皇に申していはく、我れむかし印度の靈鷲山にありて、親しく釋迦如來の會座に侍へることあり。其の眞實の如來、いまこの佛像と、毫も違ふたるところなし。此の日本國土は君臣ともに清淨心をぬきんとよく信心すべし、と云ひおはりて飄然と雲の中にいる、これより天智天皇は大によろこびたまひ、數多の寺院をたて、佛像を刻み、崇敬ますく深かりける。宮中には内道場として、佛殿を置たまひ、諸國に詔を下して、家ごとくに佛壇をつくり、佛像經卷を安置せしめたまふ。其の後ち持統、文武、元明、元正を歴て、ますく寺院を造立し、佛像を刻むこと、いよくさかんになりしこと枚擧にいとまあらざ。此の際に御成長あそばされ、佛教信仰の經歷ある、天位をうけ

たまひたるは、聖武天皇として今上の、御位にましまして、良辨僧正の勧めたてまつりたるを、大御心に深く感じたまひ、佛法興隆をなし遂んと。御道心いよく堅固にましましき。

聖武天皇は、夙に佛法を信じたまふこと篤く、良辨僧正の勧めたてまつりたるは大御心に叶はせたもふたりければ、天平九年（千百七十二年前）に詔を下したまひ、國毎に釋迦佛の像、並に普賢文殊の二菩薩の像をつくり、且つ大般若經一部六百卷を、寫さしめたまひける。これぞ日本の内國に、國分寺をつくらしめたまふ、最初にてありしなり。翌天平十年には、官の租を國分寺に納れたまひ經費に充つ、各國は、此國分寺によつて、宗教の弘導するところ、智識の開發は、多く僧侶の教化によりしなり。まことに國家教導の實踐をなしたりといふを得べし。天平十三年に國分寺毎に水田十町を施し、常に二十人の僧を置き、其の寺の外に、國分尼寺を置き、十人の尼を常住せしむ、毎月八日に、金光明最勝王經を讀みたてまつるべしといふ。國分寺建立には、行基菩薩が開基したる

如く、縁起に見へたり、良辨僧正の勸奏したる、奈良東大寺の管下に付屬する國分寺は、其の國の國府より遠からざる、しかも近きに接せざる所なるべしといふ。國分寺の所在地を参考としてあぐれば左の如し。

- 山城 (相樂郡瓶原村大字河原東)
- 大和 (奈良市)
- 河内 (南河内郡國分村)
- 和泉 (泉北郡南池田村大字國分)
- 堪津 (西成郡豊崎村大字國分)
- 伊賀 (阿山郡三田村大字三田)
- 伊勢 (阿藝郡阿曲村大字國分)
- 志摩 (志摩村國分村)
- 尾張 (中島郡國分村大字矢合)
- 三河 (寶飯郡平幡村大字八幡)

遠江 駿河 甲斐 伊豆 相模 武藏 安房 上總 下總 常陸 近江 美濃 飛彈

(磐田郡光明村大字東山)

(安部郡安東村大字北東山)

(東八代郡國立村大字國分)

(田方郡三島町大字三島宿)

(高座郡海老名村大字國分)

(北多摩郡國分寺村大字國分寺)

(安房郡館野村大字國分)

(市原郡市原村大字總社)

(東葛飾郡國分村大字國分)

(新治郡石岡町)

(滋賀郡石山村大字國分)

(不破郡青野村)

(大野郡大名田村)

信濃 上野 下野 陸奥 出羽 若狹 越前 加賀 能登 越中 越後 佐渡 丹波

(小縣郡神川村大字國分(上田町東))

(群馬郡國府大字東國分)

(下都賀郡國分寺村大字國分)

(陸前國宮城郡原町大字南目)

(羽前國南村山郡山形市の東)

(遠賀郡遠敷村大字國分)

(南條郡武生町大字曙町)

(能美郡古河村大字古河)

(鹿島郡德田村大字國分)

(射水郡伏木村大字國分)

(中頸城郡國府村大字五智國分)

(佐渡郡真野村大字國分)

(南桑田郡千歲村大字國分)

丹後

(與謝郡府中 大字國分)

但馬

(城崎郡日高村 大字國保)

因幡

(岩美郡國分村 大字國分寺)

伯耆

(東伯郡社村 大字國分寺)

出雲

(八束郡竹矢村 大字國分)

隱岐

(周吉郡國分寺村)

石見

(那賀郡國分寺村 大字國分)

播磨

(飾磨郡國野村 大字國分寺)

美作

(勝田郡河邊村 大字國分寺)

備前

(赤阪郡西高月村 大字馬屋)

備中

(都窪郡三須村 大字上林)

備後

(蘆品郡栗生村 大字栗柄)

安藝

(賀茂郡吉行村?)

周防

(佐波郡佐波村 大字東佐波會)

長門

(豊浦郡長府村 大字豊浦)

紀伊

(那賀郡上岩出村 大字西國分)

淡路

(三原郡市村)

阿波

(名東郡國府村 大字矢野)

讃岐

(綾歌郡端岡村 大字國分)

伊豫

(越智郡櫻井村 大字國分)

土佐

(長岡郡國比佐村 大字國分)

筑前

(筑紫郡水城村 大字國分)

筑後

(三井郡國分村 大字國分)

豊前

(京都郡豊津村 大字國分)

豊後

(大分郡賀來村 大字國分)

肥前

(佐賀郡春日村)

肥後

(飽託郡出水村大字國分)

日向

(兒湯郡下穗北村大字三宅)

大隅

(始良郡國分村大字上小川)

薩摩

(薩摩郡東水引村大字宮内)

壹岐

(壹岐郡那賀村大字國分)

對馬

(下縣郡嚴原町)

以上掲ぐるところの當時の日本、六十有八箇國には、孝德天皇大化の改新なし
 たまひしとき、國毎に政治をつかさとりところの政府即ち國府をおきたもうの
 定めありき。同時に、佛教についての詔勅を下したもふ、夫れよりは、恰も朝廷
 の佛教であるが如き、傾きとなりしなり。その後ち、天武、持統、二天皇のこ
 ろより、政治と佛教と接近するべく歩みをすゝめ來りて、今や地方の政廳と歩
 調を一にするため、ゆはゆる政教一致の御主意により、聖武天皇の篤き信仰に
 より、終には國毎に右の所在地へ、地方の祈願寺として、國分寺を御創建した

まふにいたる。こゝにおいて地方の佛教は、全く行きわたり、政教相離れざる
 實を行ひたれば、海内佛教の信者でなき日本人はなしといふ有様にてありし、
 この地方佛教の國分寺の御定めは、帝都の佛教より源を起したれども、國分寺
 まづ建立をつけ、後ち帝都佛教の頂點として、總國分寺の東大寺を建立するこ
 と、はなりしなり。信仰の成熟するにあらざれば、いかでか 帝都の朝廷と並
 ぶ、國分寺を總轄するところの大本山の建立を、企つることのかたければなり
 奈良朝佛教の特色とは、この地方佛教自然の大勢が促し來つて、帝都佛教の東
 大寺を建立すること、はなりたるがごとし、宜なるかな、聖武天皇が殆んど國力
 をつくして、東大寺建立に熱心したまひ、大臣をはじめ、官民一致してもつて
 大經營を成就したまひしにあらずや、良辨僧正の希望は、日本の佛教を大成す
 るにいたる、聖武天皇の御信念の深厚にましますこと、驚ろき奉るべきなり。
 良辨僧正の勸奏したてまつるところ、聖武天皇の大願を發こしたまひし、佛
 教の偉大なる工事は、帝都の空に、巍然として聳へ、十有餘丈の大伽藍とはな

りぬ。その内に赤銅白錫等の百幾拾餘萬斤を費したまひて、造營したる所の五丈三尺五寸の毘盧舍那佛の大佛像を安置したもふ。これ所謂奈良の東大寺にてありける、良辨僧正は、實にこの大寺の開山にてあり、日本總國分寺の首位にてありき。東大寺とは良辨僧正の華嚴宗を開きたる、金鐘寺をあらためて、名づけたる寺號なり。古えより東大寺と申すは、西大寺といふ寺と相對しての名なるべしとは、一般に思ひもし又記録にもしかくしるせるものもあれど、西大寺の御建立したまひしは、東大寺よりおくれること數年の後なるべし。孝謙天皇の御願によつて、天平神護元年(千四百四十四年前)といふに創めて建立したまひしが西大寺にして、西大寺とは先帝の御建立なされし、東大寺に對したる寺名にてあるべけれども、東大寺とは西大寺に對しての意味あるはずはなかるべし。聖武天皇のさしも宏大なる御計畫にて大叡願を起させたまひて、この空前の大なる佛像を鑄造したまひしころの、日本各國の國分寺を總轄する大本山にしあれば、天皇の大御心は余程ひろき意味にみそなはしたまひき。されば

東大寺の東とは印度支那にくらべたる方角すなはち大日本國の意味にして、佛法東流しきたりたるころの、大乘相應の東國の第一大寺なりといふ、御聖慮にもとづき東の大寺と名づけたもふことは、三國一とか、唐天竺にも嘗て聞ざるところの、大御佛と仰せたもふにても伺ひしることを得ん。良辨僧正が國家の福利を求めさせたもふために、聞へあけたてまつりたる造寺の御願は、この日本第一の大寺なる東大寺の創建とはなりにける。魏然として雲間に高さところの、十六丈の屋根は聳へたる、巨木もために低き思ひする大伽藍は、實に木造り御殿風の世界第一の御堂にぞある。其内に南面なされる五丈三尺五寸の毘盧舍那大佛像を安置したてまつりあるもの、これぞ世人が常に大なるたへに唱えるところの、奈良の大佛にして、赤銅等百幾十萬斤を費して鑄たてまつる銅像なり、良辨僧正の華嚴宗を開きたまひし東大寺の本尊は、この驚ろきあまる大佛像にてある。奈良の帝都の時代においての一大紀念物は、恐らく是れ以上のもものなかるべし、まことに聖武天皇の大叡願にあらざれば、なぞか斯くも

大なる空前の事業は出来難かるべきなり。

この日本第一の大寺なる、東大寺が創建なさるまでの、奈良帝都におるての祈禱の大寺院と申せば、薬師寺、元興寺、興福寺、大安寺の、四箇の大寺にかぎられてありしなり、是等の寺は鎮護國家のために建てたまひ、常に般若經とか、金光明經を讀みあげたてまつる、専ら重んぜべき祈禱寺院と定められたる此の四箇大寺の中にも、薬師寺と申す寺は特に重任であるところの、僧綱の住まふ寺格なりとて、八ヶ間敷き官寺にてありき、去りながら、是れ等の寺はみな國分寺に屬するところの、特殊の祈禱寺院といふに過ぎざりければ、今や地方の佛教は、國分寺の建立によつて定まりたるべきなれば、時代の要求としては是非とも帝都に政治を執り行ふと同等の、日本中の佛教の總本山を中央の大寺院として、創建する必要ありとは自然の勢ひとして、佛政一致の朝廷に促しを受けつるどころへ、恰も良辨僧正の、鎮護國家のために一大伽藍を御建立あらへしとの奏上をなしたてまつる、聖武天皇いよく御感深くましくて、國

家の安泰を祈り、弘く生民の福利を求めんとの大御心によりて、曩には神社を嚴かに飾り、嘉祐の恵みを仰ぎたまふあり。今又佛像を造り伽藍を建立して、地方の政治と國分寺との連絡は成就したまふ。これよりして本邦古來よりの國牀の上に、神道といふ慣習はありたれども、今より兩部神道といふところの道をたてられ、本地垂迹の説は一層さかんに唱るべくやうなりしなり。神佛合一の大伽藍の創建につき、良辨僧正の勧めたてまつりしところを、聖武天皇の大御心に叶はせたまへしが、東大寺の御創建となりき、東大寺とは大佛像を安置されてある寺にして、これが御建立につきては、四菩薩の權化が相商議したまいしなり。四菩薩の應化とは何んぞ、抑も大佛とは如何なる佛ぞやとは、等しく諸人の聞かんとするところなれば、是れを次に述べんとはする。昔し印度におひて、釋迦如來一日靈鷲の峯におひて、説法の會座をひらきたまふことあり、文殊普賢觀音彌勒の四菩薩がこの會座にはべり、法話を聽問したまひき。この演説したまひたる法義こそ、如來の初じめて法輪を示した

まへるところの根本なるべき華嚴一乘の説法にてありしなり、世はへだたり時
 ぼすぎて、不思議にも金色の大鷲の奇縁に擱られしところの、良辨僧正とい
 ふ聖人の彌勒菩薩の應化として顯はれたまふ。靈鷲山の如來の會座と、鷲の
 にしのおもひ合されて、これなみくならぬ約束なりき。先きにも申せしこと
 く、良辨僧正と宿契いとも深き御因縁によりて、聖武天皇の我國に生誕の相を
 示したまふは、觀世音菩薩の應化と仰さまつる。文殊菩薩の智量に勝れたる
 行基菩薩の徳風いよく高きこと、相合して應化の現相と申き、十大悲願の普
 賢菩薩は、遠く波上を涉り來せし應化の姿羅門菩提僧正のましますなり。かく
 も感應の四聖は、法妙の功力によつて、菩薩の方々再び大乘相應の我國に化現ま
 しくして、本尊の如來、毘盧舍那法身の大佛像を、造奉らんと商議したまふは、
 實に驚の峯の覺りの月、眞如妙理の影をやどし、十支の窓香はしく、六相の華
 は咲きそろう、法機はきたり因縁は將に熟したりける。四菩薩の應化にまします
 ところの、四聖の方は商議の席を設けたもふ、上段には十善の王位にいます、聖

武天皇は尊とくも臨ませられ。左方には印度よりの客賓婆羅門僧は異風の法服
 にて席をまもり。下座には行基僧正の智徳の姿をかまへ、良辨僧正は當席の主人
 席を保つ、四聖の御影のおるをもつて、傳るものはなかりけれども、かくもあら
 んか、良辨僧正まづ言上の主旨を述べますやう。先のごし金鐘道場においてめでた
 く探立の講をもつて、華嚴の聖典を開教し、佛日、華嚴の光明をてらす、聖上
 の威徳ますます輝き、教理の法輪は限りなく轉ずしかしながら、華嚴教主の毘
 盧舍那如來は、法身の相好すべての佛にすぐれたまふ。萬法の姿この一佛にも
 らさき、濟生利民の功德この佛によつて利益せん。眞如の妙体は恰も聖上が御
 世をしろしめしたまふに同じ。千差萬別の萬法は臣民に貴賤男女あるが如し。
 臣民は聖上陛下に屬したてまつり、聖上陛下は畏けれども臣民の國親なり。國
 家とは、この眞如にして萬法なるをいふ、今ま毘盧舍那佛は國家にして、眞如萬
 法を具足する最上最勝の佛なり。此の佛を鑄奉りたまへば、教界の主位ここに
 定まり、國家の福利を益せんことを、希くは熟慮考察の惠を垂れたまへ。行基僧

正は、謹みて述べますやう、今更くも聖上陛下のしるしめす我國は、神孫一系にして美しき國体なれば、皇統連綿にますこと申したてまつるも畏し、神國として他教を混せざる風習なりければ、恐れながら國家の本尊として、今この毘盧舍那佛を造像したまふこと、御聖慮を煩したてまつることあらん。去りながら、欽明天皇の御代におひて、豊前國廐のさし、菱形の地に託宣してのたまはく、我は是れ第十六の主、譽田天皇廣幡八幡なり。我を護國靈驗威身大自在王菩薩と名く、迹を諸州の神明に垂る、今顯に此地にあり」と云々、これより勅したまひて、八幡大菩薩とあがめたてまつること、おもふに八幡大菩薩は即ち本地にましめて、垂迹は譽田天王と一跡にましますなり。今の毘盧舍那佛は最上最勝の佛にましますは、天照大神の本地にして、毘盧舍那佛の垂迹は天照大神と二ならざる一跡にぞあり。若しも御聖慮をかけさせたまへば、天照大神の神勅にまかせたまふこそよきこと、すゝめたてまつる。菩提僧正は申したもふやう。華嚴の教主としての毘盧舍那佛は、法身の妙體にして功德深く利益普ね

からん、この御佛を造りたてまつるにつきて、相好なきはその任にあたりつかえんど、きこえあけたりける

我國において本地垂迹のはじめは、實に八幡大菩薩よりはじまりしものなるべし。この本地垂迹とは、そもいかなることを申しけるかといへば、神道佛道の二つの教を、よきばとに調和をつける方法にてある。佛敎の解釋によれば、神とあかめおるも、佛とまつるも、共にみな同一跡なり。神の外に佛なし、佛の外に、神のいますなしとぞ。本地とはこれを詳しくいへば、その本跡にして、垂迹といへば、その働きの顯はれたることなり。恰も八幡大神の神跡にましますも、本地は八幡大菩薩なり、されは八幡大菩薩の垂迹は、そのまゝ譽田天王なる一跡にてあるなり、以上のわけがらよりいへば、本地も垂迹も相ともに融通して一跡のもの、佛敎のいわけゆる融即無碍なりと説く敎から申せば、佛は神の外ならざるべく、神もまた佛の外ならじ、互にぞちらから見ても同一不思議の妙體なるべし。彼の天神七代地神五代として、この國土に顯はれたまひしは

備えに濟生利民の徳を施こし、國土を安泰になさしめんと、神達の大恵な
 り。又大日如來、彌陀如來、觀世音菩薩等のこの國土に出現の相を示したまひ
 しは、慈悲の救ひをたれたまひ、利生得樂をほとこさんとの、諸佛菩薩の誓ひ
 にてある。いま諸佛の我等をみそなはし、慈悲の冥加をたれさせたまふは、其ま
 ゝ諸々の神達の大恵を下だしたもふと、一跡不二なれば、少しもことなるところ
 なし。されば聖武天皇陛下が、一國の富をかたむけて、今こゝに造らしめたま
 はんとしたもふ、法身の位ひたかき毘盧舍那佛、東大寺大佛の造像は、いかな
 る佛にてあるかといへば、毘盧舍那佛とは、印度語の佛の名にして、盧舍とは
 之を譯して、光明遍ねく照らすといふ、毘盧舍那とは、意譯して「迷ふところ
 の闇黒なる世界を、光明をもつて明かに照らし、よく惑ひなく悟らしむ」とい
 ふ。この毘盧舍那佛といふは、理と智との二つの徳を具足せる妙躰にして、そ
 のまゝ一切萬法の姿なるべし、青き山、流るゝ川、禽獸も、蟲魚も、草木國土
 にいたるまで、みなこの二徳の冥合したる、毘盧舍那の妙躰なり。一切萬法の

本体は毘盧舍那佛である、然らばその垂迹として、一切萬法を指命したもふこ
 ころの天照大神と現はれたまひしなり。毘盧舍那佛に付屬したもふ諸佛菩薩は
 そのまゝ、天照大神につきたもふ八百萬の神達にして、同躰不離なるべしといふ。
 故に又の説には、毘盧舍那佛の山川國土であるところは、そのまゝ、天照大神の山
 川國土なるべきなり、毘盧舍那佛の又の名を大日如來といひ、また日輪の別名
 にてあるといふ。天地麗氣記といふに次の如く誌されける、「般若の心宮に遊び
 大日本國に生れ、大日如來と同しく大日靈尊に照されて、心地の蓮を開き(中略)
 憑哉神道の秘傳、善かな佛法の指南、神の妙躰をきつては、天然きはもなし、
 法性の深き理は動かす、萬像を歸命し、法身自樂の力用ほとりなきなり。兩宮
 の本の誓ひは法(身)報(身)應(身)等の權化なり、利生の方軌を設くといへども、一
 身の作なるが故に三世一生にして而して來ることなく去るとなく、常住にして
 變らざるなり。一切衆生とは本來薩埵にして凡聖は皆神躰なり。過(去)現(在)當
 (來)の諸佛は種々の應身に冥合して明神に化現し三界を衛護したもふ」天照大

神は最も尊貴の神にましまして天下の諸社に比する神なし。大日靈尊は天下を照して晝夜もなく、内外を通じて息なごきなし」と。佛の崇むべきことは、神の崇むべきがゆへなり。神の尊ときは、佛の尊とければなり。毘盧舍那佛は天照大神にして、天照大神は毘盧舍那佛なりといふは、本地垂迹の根本なるべき神佛合理にもとせくゆえにして、今こゝに同躰説を述ぶること、決して神嚴を損したるにはあらずとおもふ。毘盧舍那佛はこゝに翻して大日如來といふべければ、大日本國といふは、大日の本國なるべき義なりといふ。兎に角にも天照大神の本地にして、毘盧舍那大佛像を鑄たてまつり、これを東大寺の本尊としたまひぬ。天兒屋根命と太玉命との本地にてあるところの、如意輪觀世音菩薩と虚空藏菩薩との二體を左右の脇士とさだめ安置したまひしが、大日本國第一の大寺の金堂にてそある。

つらく此の本地垂迹の説をよみ、さきに述べたる菩薩の應誕なりと申したる四聖のことを讀みて、神佛不二二躰の説きかたなど、「佛敎の説くところを考へなば、或は淺くかんがへ、自分の誤りを悟らずして、大理を誹ることもあらんと思ふ。ゆえにこゝに少しく書きそへおかん、智慧の徳あまねく世の迷ふ者に恵み、是非善惡の識別をおしえ、佛陀の光明をもつて照すこの光のために、迷ひの霧忽ちに晴れ、疑ひの雲さんじなば、自ら苦しみ惱やむところの衆生をよく救ひ導くところの善慈の行をなすを得ば、これ實に文殊菩薩の化現とこそいふべきなり。大なる悲みをもつて熱涙をそゞぎ、温かき情をして萬民の心の底にこたゑしめ、慈しみの同情ふかく、救濟の妙音聲をいだして、三千世界に響かしめ、人道に迷ふものを手引して安心の境界に導き、少しの畏もなく、よく樂天に快遊せしめる慈悲者あらば、これ實に觀世音菩薩の化現なりと申すべきなり。幾多の大悲の行を積み、無量樂天の境界を重ね進んでは退ぞき退ぞきては進む衆生をして哀愍の法を説きとし、不懷の淨き世界に、摩尼寶殿といふ四十九の淨土を示し、永く末世の苦境を救ひ、惡因縁を遠ざけしめんため最も勝れたる修行を勵むるものはこれ彌勒菩薩の慈心なりといふ。佛とは金石土木の躰にもあ

らず、又丹青畫像の形にもあらず、實に自からの心がそのまゝ佛なるべし。自分の身軀もそのまゝ佛にことならぬ、されば世の衆生も亦そのまゝの佛なりと知るべし。この佛は、自分も、他人も、心も、差別のない平等一味の佛にてある。一心の佛は、萬人の心の佛にことならぬ、各々自身の心にて佛をつくるべきなり。この深々の妙理をさきり限りなき玄妙の教えを會得しなば、人間として凡常よりいよく勝れ秀てたる行蹟をあらはし、我れ人のためにも益することとなし得べき、昔しの聖人賢者は世のため人のため後のためになせしところ、その行ひ佛者にはあらずとも、皆かぞへて佛行の如來なり、佛なり、菩薩なりと呼ぶ、これ恰かも神道儒道は皆な佛、修行の始めなりと申したるにてもしれる。よつて神佛二道の融合をどくこと、本地垂迹の説あるゆへにして、尤も因果の理に相當すること、これ國家と宗教との關係につきて、是等のことが頗る利益の多かるべきことなればなり。本地垂迹の説は、遠く奈良朝のとき、大なる經營をもつてはじめたる東大寺の大佛につきて初めて盛んに唱導されしと

はいへども、我が國の佛敎界に、世の人等が信仰のつゞきて、今日のとほに至らしめたるは、重もに此の本地垂迹の説ありしがためなりしなり。又幾多の慈願をたれませしところの化現ましくて、大悲の菩薩應誕したまひて、末の我等に善縁をむすばしめたまひしかは、津々浦々のはてに行ども、なを寺あり堂塔あるゆえんにぞある。人も知る相摸の峻しき嶺、巨岩を堀り、斷崖を穿ちて、峯を開き大山寺を建たまひし、開山良辨僧正の慈尊の功德は、今日の我等に半空高く攀ちて、良縁をむすばしめたまひし恩徳を、あをぐの外なき偉業にてありしなり。

扱ても聖武天皇にをかせられては、天照大神の御本地佛と、不二一軀の毘盧舍那大佛の像を造り奉り、永く國家の福利を祈らんとしたまひしが、國家歴代の皇祖に對したてまつりて、神意に背くこともならはと思召したまひ、今は天照大神の御神慮を伺わんとて、天平十三年（千百六十八年前）といふに、行基菩薩に大命を下したたまひき。天照大神の御神意のほどを伺ふべき、行基菩薩のこ

の伊勢詣では、東大寺大佛を鑄たてまつることのみにてはあらで、佛道と神道との調和の基を置くことをも含みたりき。されど聖武天皇は思召たもうやう我が國は皇統の連綿と相續し來りたる神國にてあれば、この事業の神慮にたがはざるやを恐れたまひ、神託のほごを確めたまはんとはしたまひしなり。畏こくもこの勅命を拜して、行基菩薩は一粒の佛舍利を奉じたまひて、謹みて伊勢におもむき、内宮の神園内南の門大杉の下に、一心の丹誠をぬきんで、七日七夜の間參籠して、祈精の誠意をこらしたり。第七の夜にいたつて尊とくも神殿の内、奥ふかき扉らの、おのづから開くと見たてまつるや、朗らかなる聲にて唱へたまはく、「實相眞如の光りある日輪は、生死長夜の迷の闇を照らす、本有常住の姿の月輪は、無明煩惱の暗き雲を拂らふがごとし、我れ今遇ひかたきところの、大願にあひて満足することは、恰も河を渡るに船を得たるおもひす、又獲かたき寶珠を得たるは、暗夜に燈火を得たるがごとし、汝は直ちに舍利を奉持して、往きて飯高の郷に埋みおさめ、邦家のために祈請をいたすべし」

ふ。尊とき此の天照大神の託宣をうけはへり、行基菩薩のよろこびは、天を拜し地に伏し、うたゝ感涙に咽せびける。早速と都にかへり、とるものも取も敢えず、參内して事の始末を具さに奏したてまつる。聖武天皇はこの神告を大いに満足ましますといへども、又た私かに思ひたまはく、大佛建立したてまつること、毫も神慮にたがはぬ神告なれども、國家の福利にかゝる、鼎の輕重な分つどころ、深き思召を再びくりかえさせたまひ。越えて十一月三日にいたり、重ねて天照大神の御神意をうかゞはしめんと、右大臣橋の宿禰諸兄公を勅使として、伊勢の大廟に使せしめたもふ。さるほどに諸兄公の中臣神祇伯名代として神意をうけ奉りて、尤も公明なることを復奏なしたりける。神慮冥感の事實は、曩の行基菩薩と違わざりき。同じく十一日の夜に、天照大神の奇瑞は、感應の夢の告げをしりたもふ。聖武天皇夢の中に、天照大神あらはれたまひ、のたまふやう、「我れはこれ天照大神にてある、本朝は神の國なれば、神明を仰ぎたてまつるべし、然れども日輪はこれ大日如來にして、本地は毘盧舍那佛なりければ、

衆生はこれをわきまえて、悟り解してよろしく佛法を歸依すべし。との御告をうけたまひぬ。行基菩薩の復奏といひ、橘諸兄の御使といひ、今又この靈夢をかりて神意をもらしたもふ。聖武天皇の曩に氣づかはせたまひし、皇祖の神慮は明かになりし、我れは日輪なり、我れの本地の毘盧舍那佛を造り、衆生を救ふこと。嘉納しますとのことにてある。然るに又この時に、宇佐の八幡大菩薩は次のごとき託宣を下したまひき。其の神勅といふに、「神としての我れは、天神地祇の方々を誘ひて、皇の此の行ひを必ず成就せしむべく、銅の湯を水となし、我が身を草木に交えて、障害なからしめん」と。聖武天皇は日輪と同體なる、毘盧舍那佛を鑄造したてまつるに付て。宇佐八幡の贊成をうけ、神達を連れてこの作業をたすけ、身を草木にまじえても、皇をしてこれを遂げしめんとどの獎勵をうけたまひしは、大佛創立につきて、いか斗り勢力をましたまひけん。蓋し聖武天皇は熱心に神廟に向て祈願をこめたまひしをもつて、類々の奇瑞と神勅の口供をうけたまひ、今や肅々として菩薩の大悲願を起し、専ら大御心をか

たむけたもふにいたる。

良辨僧正の勸奏になり、常に聖武天皇の伽藍を建てまさんとし、神託を蒙り、神靈に祈りたまふこと、朝夕の御願につきて、良辨僧正は御諮問にあつかりもし、誓願をおこして、大御心をたすけたてまつりけり。上のなしたまふこと、下にこれに習ふは古今に同じかる風習なれば、我が十善の天子が佛像を造りまさんとて、熱心に神佛を祈りたまふとき、一般の信仰は敬神の實をうけ、奉佛の感化を自得したりける。天下のもの佛法を崇め信ぜざるものなき、信仰の時代において、至尊に御願を勧め奉り、教理の上の師表とあがめられたもふところの、良辨僧正の道德の影は、九重高き宮中をはじめ、王侯貴縉に崇敬をうけたまひ。下も田夫野叟のともがらにいたるまで、良辨僧正の名聲は響き、菩薩の化現なり、如來の再來なりとの、朝野に噂たかく、渴仰の道俗日に多きを加えぬ。曩に金鐘道場において、華嚴開經の法筵に、勅講をつとめたるところの、大安寺の審祥大徳は、天平十三年に入寂の相を示しける。良辨僧正は五十四歳にして

義淵僧正につくべき、第二の師僧であるところの、審祥大徳を喪ひたまひしあり。義淵僧正は慈悲救助の恩師なりけれども、審祥大徳は華嚴宗學の上において、賢首の子弟なりしなり。良辨僧正はこの審祥の次をうけ、賢首大師の法系をつぎて孫弟子となりたまふ。然らば支那の賢首大師は叡宗帝大極元年（我利銅五年）に入滅したり、今は審祥大徳の入滅に遭ふ。華嚴宗はこれより良辨僧正の法系の下に、獨り我が國にさかんならしめんとはする。こゝにおいて華嚴宗の命脈は、良辨僧正の光明をもつて輝き初しめ、如來初轉の根本法輪を盛んならしむべく、五十五の靈場において、善財童子が華嚴の法縁を開きはじめたるところの、華嚴別供の法會を勅して設けたまひ、これを永代の法式とは定めたまひける。良辨僧正の發願の本旨は粗は現る、といへども、未だ東大寺建立して、毘盧舍那佛を造りたてまつるには及ばざりき。

華嚴經を講じ初めてよりこゝに四年、聖武天皇の大伽藍を建立し、大佛造像の御聖旨を、天下に發表したもふことゝなる。其の詔勅の御文にいはいはく、「朕は薄徳

をもつて帝位を承けておるが、常に志は兼濟に存し、人物を撫育することをつとめ、率土の濱は、己に仁恕に霑ほひおるといへども、普天の下一般にはいまだ佛の法恩に浴しておらんから、誠實に佛法僧の三寶を信じ。其の威徳靈光に信賴して、乾坤ともよ安康に、國家の泰平を期待してもつて萬代の末にまで、福徳の善業を修めたい。この善業のために、人民は勿論、廣く動物植物にいたるまで、皆な咸とく繁榮せしめたいと思ふのである。夫れゆえに奥に天平十五年歲次癸未十月十五日をもつて、慈悲の善誓により菩薩の大願を發こして、毘盧舍那佛金銅の大佛一軀を造り奉つたのである。まことに日本の國の銅のある限りを盡して、此の大なる佛像を鑄造し、又は大なる山嶽を削りて平地にし、以てこの大なる殿堂を構へるといふわけは、其の功德の弘く法界に及ぼして、一切の衆生草木國土にいたるまで、遂には平等の利益に浴せしめ、同じく所願成就の功德を蒙り、上も下も共に菩提の因縁を造らしめんため、朕自から智識の功として、此の作業を果すものである。夫れ天下の富をたもつ者は朕なり、天下

の勢ひをたもつものも朕なれば、この富と勢との力を合せて、尊像を造るといふことは、容易に出来るやうにはあれど、萬民のため、國家のために、善事の大事を仕遂るには、中々心の至りがたきものである。只に恐るゝには、徒らに人の勞役を費す斗りにして、誠實に敬虔の信なくして、能く聖賢の感應に預かり、化益を蒙ることなかつたり、或は又この事業を誹りなぞして、反て人を罪辜に墮さすところの因縁とはなりはせまいか、などを氣つかふのである。是の故にこの事業の知識の役に預かるもの等は、最も懇ろなる誠をさしげて信念を凝らし、至誠の清淨心を發こして、各々首ら介福を招き、必ず毎日三たびづゝ毘盧舍那佛を拜禮せよ。謹みて自から存念して覺悟せよ、各々が自分の各々の毘盧舍那佛を造りたてまつると思へ。若しも更に因縁の盡あつて、一技の草にても、一合の土にても、携へ來つて、この造像の事業を助けんと願ふ人あらば、恣にこれを聽し與えよ、各國の國司、若しくは郡司の役におるものよ、此の善事業の因縁をもつて、人民は勿論禽獸草木等にいたるまで、性あるものを擾し侵

したり、事によせて收納の金品を強ひることなかれ。遠近一般に此意を布告して、臣民に朕が意のあるところを知らしめよ。との勅を下したまひき。嗚呼、尊とき大御言の御聖意のほど、文字の上に歴々と拜するを得る、宗教的の經營につき、萬乗の君にましまして、なを自から謹みたまふの深きと、大佛の像を造らせたもふ事業の發表の大御言は、肅々として注意のあつきこと、特に普天の下も率土の濱ともに百姓と同じく、平等に利益を蒙らしめんと、大弘願の深遠なる聖旨のほど、感佩したてまつるべきなり。聖武天皇の清淨心をもつて、萬靈の枯渴を救はしめたまはんと、溢れたる御信仰のほどは、大詔をもつて喚發せしめたまへるにて伺はれぬ。大悲願の德澤を普ねく及ばさしめんと、限りなき優渥ある詔勅を下したもふ。御聖旨を拜讀したてまつりなば、絶大なる鴻恩の深厚なるに感激せん社會生靈を助けんと、の御精神は、躍如として伺ひたてまつるべきなり。遠くは我が大聖釋迦牟尼世尊が、印度カピラマスの太子にておはせしも、弘大なる求道の慈悲心をもつ

て、終に宣言したもふやう。百千億の名譽も、七珍萬寶の貴ときも、我にいたしては何等のまどひを起さしめずとて、天下王國の捧げものを退けたもふ。而して五濁の塵に漬れたる王國を見捨てたまひ眞理の妙樂を悟るところの王國を開闢したまへり、今ま茲にかしこけれども、聖武天皇の宗教の御感ねんごろにましくて、信仰界を有形に現出せしめ、諸國に國分寺を作り、靈山勝地いたるところ、堂塔の影を見せしめたまひぬ。其の目的としたもふは、國泰らかにして人樂しみ、災を除きて樂福を與へんためなりとのたもふ。蒼生のため景福を求めるとは國分寺なり、國土擁護の祈願寺は工を終えければ、これ等を總轄する、大伽藍を建てたまはんとはしたまひぬ。東大寺大佛の造像にして、華嚴界會の法壇を築き、海印三昧舍那の尊像を出現せしめんと企てたもふ。その宗教事業として偉大なる經營は、特に慎重なる御聖感に出で、熱誠の洪大なること、菩薩の慈行に倣はせたまひしなり。實に感謝したてまつるべき恩恵にぞある、天下の百姓等どもにも、平等に利益を蒙らしめ、造像につきて助力の志

あるものは、勸めて善縁を聽せよ、敢て信仰あるものを妨ぐるなかれと。勅したもふにいたつては、恰も佛陀の大悲心を實現せしめたもふたのである。佛の宣ふところの、若し貧窮のものありて、財の施すこと出来がたきものは、他ものが布施慈善をなす行爲を見て、満腔の同情と、隨喜の信念をおこせしからば、その福報は布施慈善をなしたるものと、同じ果徳を得べきものなりと。世尊の慈眼をもつて憐みたまふ衆生の教導と、今この聖武天皇の博大なる悲願の詔勅に發せしめ、萬民に垂れさせたまふ聖旨とは、異なるどころを見ず。勸奏したてまつりたる良辨僧正の教意の主旨はこゝに存せしなり。されば大慈悲を垂れたまひての菩薩行を實踐したもふ聖武天皇は、實に慈悲の佛陀と敬まひ菩薩の化現なりと崇むべき、大御心のほど歴々として文字の上に拜したてまつるべきあり。申すも畏こけれども、一代徳範の師と仰がれたもふ、良辨僧正にあらざりせば、恐れ多くも聖武天皇の大御心に叶はせられ、斯くも深厚なる慈願を天下に示し、宗教事業の偉大なる計畫を果させたまはんや。佛教弘しとい

えども特別なる、廣遠の教義なるべき華嚴海印三昧の法談を會得したもふにあ
らざりせば、いかでか金銅の毘盧舍那大佛像、すなはち。玄理妙躰法身の佛を
つくりたもふべきものぞ、まことに宿善の貴とき法縁のやむことなき、彌勒菩
薩の應化にましますところの良辨僧正あつてこそ、十善の天位高く慈眼をもつ
て生民を救はしめたもふところの、觀世音菩薩の應化にまします、聖武天皇の
悲願をおこなはせたもふたのである。慈悲の應化にまします聖武天皇の、優渥
かぎりなき大御言をうけてより、天下の者貴きも賤しきも、等しく天意を拜し
王命に服し、溫言慈願の聖帝を戴くを悦び、佛陀の淨樂を與えたもふ救ひ主と
して、道義は都鄙にしかれ、徳化は四海におよぶ、天下共にこの大舉を仰ぎ讃
嘆せざるはなし。

さても良辨僧正の苦心焦慮の徳業は、聖武天皇の菩薩行として天下に發表した
まひ、偉業の政治に及ぼし國勢のますく隆盛に赴くは、偏に聖武天皇のみ
いつの勝れたもふゆえんなれど、良辨僧正の教化はいよ佛く陀の靈光に近付

くこと、はなりぬ。神佛二道の調和も、神靈に叶ひ、佛勅に鑑み、こゝに日本
帝都の鎮護の大伽藍は建立したまひける。境域四方十數町にわたる堂塔の淨地、
區畫漸く定まり八町四面と勅したもふ。儼乎として大伽藍の七堂は所定まり、
見上れば山門高く勅筆の扁額を掲げらる。震筆の麗々しき、金光明四天王護國
之寺の十大文字は、日本全土の國分寺の總本山なることを示されぬ。東大寺は
惣國分寺にして、日本惣祈禱の根本の大寺にてある。國運の消長は此寺の盛衰
に關する所以にして、皇室の隆運と共に社稷の安康を祈るべく、上は天皇陛下
の聖壽萬歳を祈り奉り、文武百官の安全を禱るが爲めに、佛を供奉し、經文を
讀誦し、以て國家の安寧を禱ると専らなりし。されば滿腔の敬信をさしけて、
聖武天皇の創造したまひし東大寺は、いかに深く天皇の大御心をよせたまひ、
國家の成運を此の寺にたよらせ給ひしか、又佛陀に向て誓はせたまひしかは、
次に示すところの勅願の御文にて伺かひしらるべし。其の勅願文にいはいはく「代々
の國主をもつて我寺(東大寺)の檀越となす、若しも我寺興復するならば、天下

もまた興復せん。苦し我等衰弊するならば、天下もまた衰弊せん。復た誓ふらくは、後の代にいたつて不當の主さか、邪賊の臣があつて、若くは犯し、もしくは破障して、正道を行ぜざるもの、この人はかならず、十方三世諸佛菩薩一切の賢聖たちを、破辱したるところの罪を蒙り、終には恐るべき大地獄に墮ちて、無數劫のあいだ永く苦しめられ、出離することなし、夫れのみならず、十方一切の諸天梵王、護塔大善神王、及よび普天率土の有勢無勢の天神地祇七廟の尊靈、ならびに佐命立劫、大臣將軍ども、大ひなる罪禍をおこして子孫をほろぼされん、若しも犯し瀆れに觸れず、敬まつて勤行するものは、世々幸福を累ね、終には子孫を隆かんらしめ、共に苦界を離れ、早く悟どりの妙樂を得られん。」と斯くの如き勅願文を拜讀したてまつりては、何人か國運の消長を偏えに佛陀の冥護に委ね、天下の勢力は全くこの寺に計りたまひしことを察し得らるべし。代々の國主をもつて我寺の檀越とし、我寺興復せば天下興復せんといひ、我寺の衰弊は天下と共にせんとまで、誓はせたもふに至ては、萬年の末

までも國家と盛衰を共にせんとの勅願をなしたもふ嗚呼佛教の盛なるは東大寺の頂點を示したるときなりしなり。聖には造佛の大詔を誌し、重ねて勅願の御文を寫しければ、聖武天皇の洪大なる御願は伺はれたれども、當時の宗教思想の有様を申せば、専ら國を治め天下を安泰ならしむる目的を以て、寺を創じめ佛を造りたるなり。如何に完全なる政治の具備するとも、天災地變疫癘の如きには勝つことかたし、尙ほ民心に道義の教へを鼓吹し、神明佛陀の冥護によつて、災厄を消除し且つは徳風を涵養せしめ、一面國家の平安を祈ると共に政治宗教を一致せしめんとつとむ。我が國體上の習慣を改ため、神佛二道を調和せしめたる佛教を國家教と定め、たまひ、政治の實施は宗教の宣布と共にし、宗教の宣布は直接に朝廷の威力をもつて、教導の實功を遂げしめんとす。されば執政の官吏と宗教宣布の僧侶とは、執ひ歩調を一にして脈絡を通せざるべからずといふにありき。奈良の帝都には政治集權の中央政府あつて、萬機を統御したもふ天皇の主宰者あつて、國家の

進運を計らせ玉ふ。之と同時に宗教の側としては、中央の大寺を建立して總國分寺即ち東大寺をおきたまひ、天照大神の本地なる毘盧舍那大佛像を安置したもふ。其の佛像を造らせたもふとを申さんに、聖武天皇は天平十七年（千百六十四年前）八月二十三日といふに、大和國添上郡山金の里において、五丈三尺五寸の大佛像、天照大神の本地にまします、毘盧舍那金銅の大像をつくらんと、これが手始めをなしたもふ。東大寺要録にはく「天皇親ら御袖をもつて土を入れ給ひて、持ち運び大佛の御座に加ふことをなしたもふがゆえに、公主夫人命婦采女などの文武官人にいたるまで、皆な土をはこびて御座を築き固むとあり」と、是等は彼の佛みつから萬乘の貴ときを捨て、俗界を脱したる精神上の教團を作くりたまひてより、佛の眼中には王位もなければ、貴賤貧富の差別なく、一視同仁の平等にして、只管布施慈善をすゝめたまひ。相たすけ相すくふの徳を養はしめたもふ。今こゝに天位至尊の萬乘の君が、御袖をもつて佛壇を築くところの土を、親から運はせたもふは、全く精神界の修行にして、教

義上の菩薩行を實踐したまひしものなり。

この空前なる大佛の銅像を造らせたもふにつき、名たる鑄工の大手腕を要するときにてあれど、御丈け五丈三尺五寸の座像を鑄たてまつるに、手を加ふべきものなき大業にてありしなり。然るに國中の公麻呂といふものありて、此の名譽の設計をなすべく大命を蒙むりける。この國中の公麻呂といふは、もと百濟國人の末孫にてありける。天智天皇の二年に我國へ歸化したるもの、今や國中の公麻呂は巧に思をめぐらし、苦心の結果この空前の大鑄冶をして竟にその成功をつけたりける。この巨大無比なる佛像を作る順序として、先づその敷地を構え、土壇を築き且ち堅められしなり。現今奈良大佛殿は修繕中にして、去る明治四十年修繕用の足場を構えけるとき、大佛の土壇中より結構なる寶物類を數箇發見して、現在東大寺寶庫中に嚴重に保存せらる。其の品柄は金造りの刀劔、甲冑、鏡、銀壺、寶玉類等なり。これを最初彼の天皇親ら御袖に土を運ばせられ、公主夫人及び文武の官人相共に佛の御座を築き堅めたもふとき、いと

盛んなる地鎮を祭り、鎮壇作法を取り行はせられたるとき、埋藏し奉りたる寶物にして、全く御物たるものにてありしなり。萬代不易の金剛法座としての佛壇はこゝに出來上りける。これ等の佛制作法としては良辨僧正は申さすもかな、僧正の高足實忠和尚、行基菩薩なども、只管造佛の作法を掌せり、且つこの大業を助けたるなり。めでたく佛座としての土壇は出來上りければ、大命をうけたる國中の公麻呂は、巨大なる佛像を鑄たてまつるため、佛の原型ゆはゆる鑄型をつくるべく、善案を運らし良巧を慮つてもつて木材を組み、骸骨となしたる上、佛後に土の山を築きなし、泥砂を交へて佛像の鑄型は漸く作り上げられたり、土壇を築きてより十四箇月を経て、原型の製作こゝに成功を告ぐ、天平十八年十月六日には、天皇、太上天皇、皇后三陛下は、聖駕を良辨僧正の護持しまつる、金鐘寺に行幸啓あらせたまふ。これ毘盧舍那佛を供養するため、御臨場あそばされたるなり。御佛の前後に燈光を供へたてまつること、實に一萬五千七百有餘杯にして、夜間一更を過ぎることに、數千の淨僧を集め、各

々手に脂燭の法燈をさしけて、梵唄の聲はがらかに、佛を圍繞すること三匝にして、讚嘆供養の法筵をかざる、夜三更にいたつて、聖駕は宮に還らせたまふ。これ大佛原型の塑造なりあがり、五丈三尺五寸の尊容は新開の淨地に、空中高く聳えたるために、東大寺はいまだ建築にいたらざるがゆへ、近くの金鐘寺に行幸あそばされ、盛觀嚴肅なる供養を修したまひしなり。その毘盧舍那佛像は、いかなる姿にましませしかといへば、端嚴なる妙相にして、蓮華臺座の上に結跏趺座したまふ。右手は胸邊の高さにかろく舉げて、掌を開きて外に向はしめ、左手は延べて膝の上に安んじ、掌を上部に開き指を軽く屈曲せしむ。南面したまひて、軀幹の泰然たる、四肢は權衡の宣しきを得、衣服の兩腕に纏へる様は自然にして、蓮座上に裾の垂れたるは實地のものごとし、全容はいとも優大にして強弱に失せず、健刻にして莊んなる、まことに美妙法相の尊軀にてある。今こゝに尊像の寸法を述べて、未だ參拜せざるものに紹介せん。

御長五丈三尺五寸

面長一丈六尺

廣九尺五寸

眉長五尺四寸五分 目長三尺九寸 鼻前徑り二尺九寸四分
 全高一尺六寸 口長三尺七寸 耳長八尺五寸
 肩長二丈八尺七寸 胸長一丈八尺 臂長一丈九尺
 腹長一丈八尺 肘ヨリ腐マデ長一丈五尺 手頸廻り一丈三尺五寸
 大指廻四尺八寸 全長四尺四寸 中指廻三尺二寸
 全長五尺八寸 小指長四尺四寸 無名指長五尺三寸
 頭指長九尺四寸 手掌六尺五寸六分 全幅六尺八寸
 足裏直徑一丈 全大指三尺二寸 全大指三尺二寸
 全廻四尺二寸 膝前徑三丈九尺 厚七尺
 螺髮九百六十六 各高一尺 徑六寸
 蓮華銅座大小五十六枚 各高一丈 徑六丈八尺
 以上の中、蓮華銅座につきて少しく述べおかん。座上の直徑は六丈八尺にし
 て、上部の圓き周り二十一丈四尺、臺の周り二十三丈九尺ある一箇の大蓮座な

り。其の形は誰れ人も知れるごとく、辨は上下の二層より成る。上層は直立し
 て蓮房を包み、下層は俗に反り華と稱して蓮辨は地に敷ける普通狀なり。蓮房
 の周圍は二重の蓋をめぐらし、二十六の蓮實の形を具なふ。上層華辨のところ
 に、精密なる模様佛界の圖を彫刻したるものなり。これぞ梵網經に説く所の次
 の意義なるべきなり。「我れ今盧舍那、方きに蓮華臺に座す。周匝せる千華の上
 復た千の釋迦を現はす、一華に百億の國あり、一國に一釋迦あり、各菩提樹に
 座す、一時に佛道を成す、千百億の釋迦、各微塵衆を接す、俱に我所に來り至
 の云々」とは蓮華藏世界の盧舍那佛にして、周匝千の蓮華の上には華をとり百
 億の四天下を現はしたもう。又いはく、彼の大山を削つて、堂閣を構え、國銅
 を傾けて、佛像を鑄る。是をもつて十方世界海盧舍那佛、臺上に跏趺したま
 ひ、而して青蓮の臉を開き、千百億國釋迦文佛蓮葉の中に端座する云々。こゝ
 に蓮座の一華辨中の圖柄をいへば、最も下部に七箇の須彌山の圖をあらはし、
 而して其上に二十五の横線をひく、線中に家あり佛ある。これ一國一釋迦の意

なるべきなり、印度に出現せし釋迦牟尼世尊は、實にこの位置なり、線上恰も瓣の中央部に當つて、釋迦說法の圖あり、左右に二十二の諸菩薩侍り圍繞す。更にその釋迦の頂上より浮雲の涌出する、其の雲上に三十六体の諸佛を畫きあり。かくの如く每辨に彫刻せる蓮臺の圖こそ、華藏世界の曼荼羅圖なり。この圖こそ臺上の大なる釋迦佛即ち毘盧舍那佛の法身最勝の位ひを示すこととなる。いよく天平十九年九月二十九日をもつて、東大寺大佛鑄造をはじめられぬ。鑄型は已に前年十月に出來上り、供養は六日に行はれたりといへば、第一回の鑄造にいたるまで一ケ年、その間に於ての鑄工の苦心は心に尋常の事にはあらざりしならん。鑄工としては國中公麻呂の外、大鑄師は大和國人高市の大國、高市の眞麻呂、柿本男玉等最も有力なる名工なりしなり。これ等のもの成功の後ち、行賞の恩典に浴したるを見れば、尤も重んぜられたる四人なるべし。國中の公麻呂は四位を賜ひ、官は東大寺の次官兼但馬の員介になつたりき外三名は正六位上高市の大國に、他は從五位下を授けられ、特に姓

を運とたもふ。大鑄師等は其の勞を報ひたもふの厚き天恩の優渥に感じたりき。實のほか安勅島足、田邊國持、秦祖父、秦船人、秦常大吉、秦仲國、山代野守、秦乙麻呂、辛人三田次、狛身名萬呂等も、皆を鑄工として造像につきて御用をつとめたること記録に見ゆ。之等の大工小工の鑄師が苦心して營める大銅像は、實に三箇年の日子を費し、八箇度の鑄法をもつて、其工全くこゝに終る、此の空前の大鑄造に用ひたる、用銅は四拾萬壹千九百拾壹斤、熟銅は叁十九萬壹千叁拾八兩、白鑄は壹萬七百貳拾貳斤壹兩、水銀は五萬八千六百貳拾兩、炭は壹萬六百五拾六斛を要し。其の外尊像の頭髮には、九百六拾六箇を鑄たてまつる材料に用ひたる、銅の量は九千叁百貳拾四斤拾貳兩なりし。是等の渾大なる原料をもつて目出度く大銅像の御佛は天平勝寶元年十月をもつて、尊とき相好を拜し得ること、はなれり。大佛の尊容は地金造の大略は成功したり聖武天皇の大誓願はいよく、進み御満足に近付きけり。良辨僧正の目的もますます悦びを向へぬ。然るに大計畫の佛

像は出来上り、今や蓮瓣の毛彫りに着手しけるときになりたれども、尊像に塗りたてまつるべき、黄金の我國になきことは、時の一大問題なりしなり。元より唐國に求むるは、こと安けれども、我が皇祖の天照大神の本地佛、邦家の祈願寺の本尊として、印度支那にも未だなきどころの、大佛像を造らしめたるも、付佛陀の光をましたてまつる塗金の材料をして彼の國に求むるは本意にあらずとの思召に出でて、いたく聖天武皇は宸襟を惱ましたまひき。いかにしても大御心安らずありければ、終に良辨僧正を召して具さに求望の報慮を漏させたまふ。さなきたに御歸依を忝ふしたる良辨僧正は、この御願をして何卒成就せしめ、佛陀の莊嚴を美ならしめ、もつて大御心に副ひたてまつらんと。謹しんで妙法功力をもつて御願を叶はせたまふやう、祈請し奉ると御誓ひ申し上げける。かくて行李も匆々に翻然として出立したり。錫杖を飛ばして大和國金峰山に向ひ、峻嶺を踏みのぼり、谿谷を涉りて、山神の藏王權現に詣でいごも懇ろに修法して祈るやう、こたび邦家の廟壇に丈六の舍那を祭らんとし、聖帝ため

に國力を盡して造像したもふ。然るに尊容を瑩くどころの黄金を要す。外國に求むるは神旨に背き本願に副はず。希くは皇國の末ながく運命久しからしめんため、蓄藏したもふところの黄金を與えられよと、懇請しきりなりければ。藏王權現の告げには、此の地の黄金は彌勒菩薩出世のとき、大地に敷くために蓄藏するもの、今俄かに之を出し難たし。然れども善願を願ざるにあらず。依て近江國湖水の西にあたる、勢多の縣に一の山ありける。これぞ如意輪觀世音菩薩の靈應の淨地なり、汝が彼の所に赴き持念を凝せば、觀世音菩薩の冥告は必ず黄金の出所を示すこと、鏡に物をうつすがごとしといふ告示をうけたもふ。良辨僧正は藏王權現の許を辞して、彼の近江の勢多といふ湖上影清きところ、山勢靈氣の満つる山に赴きぬ、時に大なる巖上に座して儵々と魚を釣る白髪なる老翁の氣品賤しからざるものあり。良辨僧正は禮し且つ問ひたもふやう、汝はそも何人にておわするや、我れは求願のありて如意輪觀世音菩薩の靈地をたつぬるもの、幸ひに教えたまうの便りを得んど。白髪の老翁は答へるや

う、我れはこれ山主比良明神なり、汝ちの探る地は彼の山にてある、彼の山は如意輪觀世音菩薩の應現まします、清淨の靈地なれば往るて祈請せよと。云ひおはつて、忽ち翁の姿を隠し見えたりしといふ。此處において良辨僧正は近江國栗太郡勢多村なる、湖水の清きこと鏡の如く、綠樹神靈のこもる、岸頭の勝地をもとめ得たれば、先づ祈願の法座を定め、大佛の尊容に塗り飾るところの黄金を、皇が國に出現せしめたまへと修法に餘念なかりき。良辨僧正は大誓願をもつて、山樹を開き、巖上を淨め、一刻も早く感應を得て、聖武天皇の大御心を安めたてまつらんと、一字の堂を山の頂きに建立したもふ、これぞ世に有名なる近江の石山寺のはじめにてある。自から如意輪觀世音菩薩の像、并に執金剛神の像を造りたもふ。今に良辨僧正御自作の靈像をまつることありかたき。さても良辨僧正は丹誠をこらして、朝の祈には如意的悲願を求め、夕への願ひには黄金の涌出することを請ふ。この専心の誠は神慮に徹したりけん、誓願の法力は佛意に叶ひ、不思議にも、從五位上陸奥守百濟敬福が、天平

二十一年に小田郡金華山より出すところの、黄金九百兩を貢ぎたてまつることあり。之れより先き天武天皇の大寶元年に、陸奥に黄金を探らせたまひしも、終に發見することなかりき。然るに今に至て我邦未だ見ざりし黄金の、始めてこれを得たりければ、天皇陛下には非常に喜びたまひ、直ちに幣を奉じて五畿七道の諸社へ勅使を派せて、奉告式を執行はせ、且つまた近江石山寺に大法會をあけたもふ。然るに重ねて下野國に黄金の出るありと奏しける。奇瑞しきりにいたり、靈驗ますく、新たなりければ、偏に良辨僧正の修法功力によるべしと讚嘆したまひぬ。この黄金の我國に初めて見出したるにつき、伊勢大神宮の神主は從五位下に、禰宜は從八位上に、叙せらるゝこともありき。天下泰平を意味する天平といふ年號は、この空前なる黄金を我國に出現せしたため、その年の四月をもつて改めて、天平勝寶と稱したまへり。大伴の家持は、この陸奥の金華山より黄金の出でたることを、祝して歌をたてまつりける。其の歌に、「すめらぎの御代さかえんとあづまなる、みちのく山にこかね花咲く」と思

ふに此時の喜びは、特に聖武天皇および家持などの喜びにとゞまらせ、國民一般に、やかましく喜びを傳えたるならん。抑も絶大の信仰をもつて、聖武天皇の大佛に塗るべき黄金の、我國に初めて出でたることは國家の大吉祥なり。かゝるときには不思議の神佛冥感は人情によく徹するものにぞある。當時の國民一般の思ひは、天皇の威徳をほめたてまつるとともに、良辨僧正の修法功力の普通ならざるを讚美し、至るところ不思議の佛徳に感んぜざるはなかりき。

大佛像に塗りたてまつらんとする黄金の、我國にはじめて發見したるは、偏に御佛の功力によつて因縁を導びきしといふ。聖武天皇の大御心にてありければ、東大寺に行幸あらせたまひ。未だ塗金なしまさぬまゝの毘盧舍那佛の前殿におゐて、陛下は恐れ多くも北面したまひて、尊像にむかはせたまひ、皇后皇太子を左右に臨ませたまふ。親王公卿文武百寮をはじめ、土庶分類にいたるまでものは、後殿に列せしめたまひて、左大臣橋宿禰諸兄をして、いとも嚴かに

詔勅を讀みあげ、佛陀に謝せしめたもふ、その詔勅の文にいはく、

三寶の奴と仕へ奉る天皇らか、命、廬舍那の大前に奏し賜ふと奏さく、此大倭國は天地の始より以來に黄金は人國より獻つること有れども、此地には無きものと念へるに、聞看食國の中の東の方、陸奥の守從五位上百濟王敬福は、部内小田郡に黄金出たりと奏して獻れり。此を聞食驚き悦び貴び念くは、廬舍那佛の慈賜ひ福へ賜ふものに有りと念へ受賜はり恐り戴持ち、百官の人等率ゐて禮拜み仕へ奉る事を、掛くも畏き三寶の大前に恐み恐みも奏し賜はくと奏す。

此大詔のそにつき、古來よりいろくの説ありて、我が十善の天子が佛法を尊信したもふ餘りに、佛の前殿において北面ましますすら臣下の禮なるに、まして佛法僧の三寶の奴といふことを、公けの詔勅に發表なされけるは、あまりにあさましとか、かなしとかいひあへるものありける。これ聖武天皇の大御心をなもひたてまつらざるもの、説にして、御佛としての毘盧舍那佛にのみ思をよする

ひがめによる。不可思議妙躰とするは、我國の神代ころよりの諸神なること疑ふべくもあらず、形象は神たり佛たりとも、共に人類以上の理躰にして、人類を保護もし我等に利益も與ふる、冥顯一致のものたるは申すまでもなし。其のころの信仰心は、今ころのことき淺はかな思慮に出でたるにはあらで、萬物はこれみな唯心の造るところにして、心は縁のなすところに起るといふ、深遠なる教義よりいでたるものなり。今かりに同じ一宗を信じる人の仲間においても、其の各が信仰する程度には面のおのく相異なることく、大小濃淡の差別あるとはまぬがれがたし。かく靈体を信ぜる一人ですら、時と場所と縁する順序によつて、動き且つ集散することあるものなれば、萬乘の天子が熱心に信仰したまひし佛像は、人類以上の靈體なれば、萬物唯心の造るところの理の表彰なり。況んや皇祖天照大神の本地にまします毘盧舍那佛は、法身の最上位の心造の如來におるておや。大佛は其儘神體なりと見ると、本地垂迹のわけによる。故に聖武天皇の北面したまひたるは、皇祖天照大神に北面したまひたるに同じ。三寶の奴どのた

もふは、萬物一心の理の本躰にむかつて詔りたまひしもの、諸神に報告したまひしごとく、本地の佛にも報告したまひしなり。是等のことは天位にむかつて何の障りあることを見出すを得ず、むしろ大御心を伺はせ私しのひがことに事よせて、くさくの申分をなすと、にがくしきことどもなり。此の時從三位中務卿石上朝臣乙麿が宣したてまつりたる文中を抜ひて述ぶれば左の如し。

東方陸奥國の小田郡より黄金出でることありと奏し奉れる所の念は、種々の法の中には、佛の大御大世も國家を護が爲には、勝れ在と聞召て、食國天下の諸國に、最勝王經を坐せ、盧舍那佛を作り奉らんとして、天坐神、地坐神を祈禱奉る。掛畏き遠天皇始て、御世御世天皇御靈たちを拜仕奉り、衆人を伊謝奈比率て、仕奉る心は、禍息みて善成り、危を變て全平がむと、仕奉る間に、衆人は疑を成さず、朕は金少なけむと念ひ、憂つ、在しに、三寶の勝神き大御言驗を蒙り、天坐神、地坐神の相宇豆なひ奉り、幸はへ奉り、又天皇御惠靈たちの賜ひ撫賜ふ事に依

て顯若示給ふ、物在しと念し召せば、受賜り貴歡受賜り、進も知らず、退も知らず、夜日畏恐まり所念せば、天下を撫惠ひ賜事理に坐君の御代に當て在べき物を拙く多豆何なき、朕の時に顯し示給へれば、辱なみ愧しみなも念す、是以て朕一人や、貴大瑞を受賜らむ、天下共頂受賜り歡しむるべし、理在べしと神奈我良も念坐て、なも衆を惠賜ひ、治賜ひ御代の年號に字を加賜くと云々

先には聖武天皇の毘盧舍那佛の大前に悦び賞びて、黄金の出現したることは偏えに盧舍那佛の慈みたまふどころの福ひぞと仰せさせられ。今こゝに親王諸卿百官人等、および天下の公民衆を代表して、石上乙鷹の大佛に捧げける宣文を讀めば、天照大神の本地にまします、國家鎮護の本尊としての御佛に讀み上げたること明かなり。良辨僧正の石山寺を創立したる事蹟のいかに顯著なる修法の妙智力を天下に傳えたるか、上は萬乘の主君の宸襟をやすめまらせ、朝野の貴紳みな未だ我國になかりし黄金の出現せしと、良辨僧正の偉力勳功によるご讚嘆せざるはなし。道俗はその徳風に靡き生ける菩薩と仰がれ、當時の信仰

界は良辨僧正の一身の光明をもつて照したるごきなりし。

黄金は我國に出現したりければ、之をもつて、大佛の銅像に塗りたてまつることにはなれり。大なる御佛に添ゆる後光も亦したがつて高くして廣きものならざるを得ず。京都の工人等之を作るものなかりければ、勅して良辨僧正の高足なる實忠和尚に命じたもふ。實忠和尚は工人等を監督して造りたる圓光壹基、其の高さ十一丈四尺、廣さ九丈六尺なりといふ。東大寺要録に載する實忠和尚二十九箇條の文中には、大佛の御光を仕造し奉ること、寶字七年より寶龜二年にいたる九箇年、造り奉ることの御光一基、高さ十一丈廣さ九丈六尺、右大佛師從四位下國中連公鷹等申して云ふ、此の大佛御光造り奉る方法を知らず、遂に辭して造らずごあり。時に僧正賢法師(良辨僧正)告げて云く、汝ち實忠之を造り奉るべしごなり。こゝにおゐるて實忠は、師命を拒むごを得ず、至心に誠を投じ、諸の大工等を率て件の大御光を造りおはる。其の御光には天空に化佛の飛ぶごころの、五百餘尊体の小佛を付着せしものにてありき。本尊の御光は見事

に出来上りぬ。左右に奉安します、脇士の二菩薩も亦偉大なるものなり。金色の二菩薩は天平勝寶元年四月八日に出来せり。其の寸法をいへば各高さ三丈、面長六尺、廣五尺、口長二尺一寸、耳長五尺九寸、肩長三尺九寸、目長二尺二寸、東方には如意輪觀世音菩薩、西方には虚空藏菩薩、これぞ尼信勝と尼善光とが造りたてまりたるものなりける。共にこれ乾漆をもつて作り上げたるものにして、眩ゆき斗りの金薄にてかざられたり。天兒屋根命、太玉命、の二柱神の本地なるべき、大佛像の脇侍として二菩薩はこゝに安置したまひき。其の金色のまはゆき御光と、莊嚴のいこも美麗なる蓮座高臺の具へさせらるゝ、此脇侍の菩薩一軀にても、いまかりに普通殿堂の本尊に安置したてまつりなほ、丈六の尋常寸法の佛像よりも、なを偉大なる佛軀なるべし。巨大無比なるところの大佛舎那像を本尊に奉安し、之れ等の脇士を合せて三尊の御佛を、そろへて安置したまひしことは、實に偉大なる御姿を拜し驚ろかざるものはなかりき。年月は久しくへだて二度まで御堂は焼失したれども、御佛の變らせたまはぬまゝに、

現在拜しまつるぞありかたきことにある。されば大佛尊像は銅像に塗金しませし、世の所謂金銅毘盧舎那佛にてましますことは、上來すでに述べたるごとし。然るに其脇士の二菩薩は銅像にはあらで、漆と布とを用ひて作り固めたる上に金薄もて塗りまらせたる、乾漆といへる製作にてありき。なを其外には殿内の四方の角に安置したるごころの四大天王の像あり。さまざまの彩色をもて、飾れる装束をめしたる姿も、また恐ろしく大きくありき。其高さ各々四丈ありて足に踏みたる鬼ですら、その長さ各二丈八尺なりしといふ。聖武天皇の大観願をおこしたまひて、我が國の銅のかぎりを傾けつくして造らしめたもふ大佛像は、五丈三尺五寸の尊容は出来あがり、いと盛んなる法要をとり行はせたまふごいへども、未だ黄金を塗りたてまつるの運びにいたらずしてありしが。天平勝寶四年(千五百五十七年前)の三月より塗金の工事は始められ、全七年の正月にいたりて全く黄金の膚をみがき上げぬ。その間は二年七ヶ月を要して漸く功はなり業はおわりぬ。塗金に費したるごころの黄金の斤量は

練金壹萬四百四拾六兩にてありしなり。或る人が之れを現時の價ひに算したる
 ここあり、參考までに誌さんに一兩金を二十圓がへこして、代價貳拾萬八千九
 百貳拾圓なりといふ。この練金のほかに前に申せしいろくの原料の地金等を
 計算すれば八拾萬圓におよぶ。此の餘に十年の間これに關はりたる役員人夫の
 勞銀を加へなば、約百五十萬圓以上に及よはん。廣大なる殿堂等の費金をこれ
 に加ふれば總額五百萬圓を超へたりしならんかご。其の當時においての日本人
 は四百五拾萬人ばかりにてありしといふ。この人口をもつてかゝる大經營の成
 功したるといふは驚ろくの外なかりき。塗金の工はいまだ成り上がらざりし
 に、開眼の供養を先き立つて執り行はせたまひしといふ。いかに其の竣功のい
 そぎけるかを思ひやるべきなり。聖武天皇の國銅を盡して大像を鑄たてまつる
 こ、仰せられし大經營はこゝに全きを告げぬ。これよりは彼の大山を削つて空前
 の大殿堂を造りたまへる、大工事を創じめられたる、大佛殿建立の順序なれど
 も、詳細にこれを述べればこゝに繁ければ、東大寺伽藍の配置と大佛殿の構造と

をあらく誌すに止めおかんとす。

東大寺と申すもとは添上郡にある霜索院、すなはち金鐘寺と號しけるものより
 おこり、之は朝廷より良辨僧正のために賜はりたる寺なりける。今こゝに空前
 の大事業を擧げさせられて、五丈三尺五寸の大佛像を安置ましますも、もご良
 辨僧正の勤めたてまつりたる奏言の力をりしこと明かなり。やがて東大寺とい
 ふ名の定まりけるはこれより後なりしなり。時の平城内裏より東の方にあた
 つて、巍然として半空に聳へたる十餘丈の大伽藍こそは、日本各國の國分寺を
 統領するところの國家祈禱の大本山東大寺にてある。境内は廣大の地を占め、
 規模の盛大なりしことは、世の耳目を驚ろかしたりける。其の宏壯なる東大寺
 伽藍中において、特に金堂としての大佛殿内には、金銅毘盧舍那の大佛像は安
 置したてまつる。其の殿堂は南面に造られ、周圍は廣々として歩廊をもつてめ
 ぐらしたり。歩廊の四面には門をひらき、南正面には、稍大なる中門をつく
 る。門外の東西に町餘の隔てをもつて、高さ各叁拾貳丈ある七重の高塔二基あつ

て、青空に突立ちたる莊嚴は他に見るべからざる偉觀にてありし。更に南方にあたつて南大門あり、今なほ世人の記憶にとゞまるころの運慶と堪慶との二大佛師の造りし。巨大なる二王の立てる門これなり。門の左右には築垣をもつて長くのび繞らし、西に延びるもの更に北に折れて數町におよぶ。この築垣にそつて外に南よりすれば西大門、中之門、輾轉門、北御門等を開く。大佛殿の後ろには宏壯なる大講堂あり、其の外食堂、大湯屋、中門堂、大鐘樓、絹索堂、銀堂、千手堂、正倉院、戒壇院、尊勝院その他には三面僧坊堂舎なども、山に踞し谷に跨がりて、建て並べたる數は幾拾棟なるをしらすといふ。その盛んなることは、實に日本の第一加藍として冠たる總國分寺の名にそむかぬ大伽藍にてありしなり。聖武天皇の御誓願により非常なる苦心をかさねさせられて、創めてこゝに御建立したまひしところの大佛殿は、二重屋根のつくりにして其の堂の高さ拾五丈六尺あり。東西の長さ貳拾九丈廣さ拾七丈、基砌高さ七尺あり、東西砌長參拾貳丈七尺南北貳拾丈六尺、柱の數は八拾四本みな一本木なり。

殿の扉戸拾六間なりしといふ。單なる一棟と申せば容易なれども、其の建坪の面積實に壹千七百九拾壹坪五合七勺を要したる一棟の堂宇なりといふにいたりては、いかに巨大なる建築なりしか、我國において壹千百五十年以前にかくも偉大なる建築物を、木造りの殿堂として宏壯無比のものを造られしといへば、技術の發達のほど察しらるべきことにぞある。某工學博士の談るところによれば、かゝる大工事は近時のごとく技術進歩の今日よおいてすら、猶ほかつ造營すること難かるべしといふ。又た堂内の天井の高さ拾叁丈なりしなり。此の高さの下には京都東寺の五重の塔と、奈良興福寺の五重の塔をのぞきなほ、我國において現在するところの高塔はことごとく、大佛尊像のまはりに陣列しても堂内は優に餘地あるべきなりと申す、もつて其の堂内の廣大なると天井の高きことを證明することを得ん云々。かゝる大殿堂の内陣には、金色は燦爛として仰ぎ観るも眩ゆきばかりの、端嚴妙相を具えさせらるゝ、恒說華嚴の盧舎那佛の大御姿を安置したてまつり。前に述べしごとく精巧なる彫刻をもつての大蓮

座に端座せしめたもふ。其の内部の裝飾につきては美をつくし装ひをこらしたるなり、柱はすべて一本の木より作られし丸柱にして、その徑り叁尺にして長さは殆んど百叁拾尺にいたりしもの、それにはくさくさの佛菩薩の畫をもつて彩とり飾られたるものなりき。天井にいたつては、格子ごとに四季の草花を美々しく色彩をもつて畫か、れ、附着せし金具などもすべて、透彫を施したる鍍金をりしといふ。内陣の東西には錦をもつて織られ、繡刺をもつて綴りたる、御帳を吊るされたり。御帳の寸法も随つて廣大なるものにして、各高さ五丈四尺廣さ三丈八尺四寸ありしと、その模様は觀自在菩薩の曼荼羅圖にてありき。東方の御帳は天平勝寶六年三月十五日に聖武上皇の御願により、製造に着手したまひしが、成功にいたらずして、上皇におかせられては登遐(崩御)あらせられしゆえ、今上孝謙天皇が上皇の御遺旨をつかせたまひて、全九年五月二日といへば、即ち上皇の周忌に當らせたまふとき、特に佛壇を飾らせたまひしものあり。其御帳の銘にいはく「裁金疊縷、分百形面圖眞、貫珠紫絲、合千光

而寫妙、三十三變隨成(以下略)」。西の御帳は今上孝謙女帝が皇太后に當らせらるゝ光明皇后の菩提のために造りたまひ、佛壇に納め吊したまふものにして、不空羅索觀自在菩薩の像を織らしめらる。其の銘にいはく「前略像高三十五尺其濶二十五尺、光谷圓滿不異神功、信如瞻仰眞儀、天下更無二」。この御帳の銘文を拜讀しても、大膽なる圖の構えを顯はし。その精巧を究めたるまことに美なる織物にてあり、且つ雄大壯麗の大計畫なる現状は實に偉觀にてありしものごとし。

良辨僧正は先きに天下國家の隆盛を祈るべき爲に、伽藍を建立したまふべく奏上したてまつりたるを、聖武天皇は聞召したまひて、深く萬民を恤みたまふ大御心よりして、天平十五年十月には毘盧舍那大佛像を造立しましたすこの爲に詔勅は天下に發布したまひき。この勅文は前既に掲げたるるとき優渥なる御主旨にてありしが、いまこの大誓願をおこしたまひて菩薩の慈行をして、十善の天皇が親から御袖に土を運び佛の臺をつくらしめたもふがときは、全く良

辨僧正の奏上の主旨、こゝに存せしなり。彼の印度におるて、頻婆沙羅王が、自ら竹園を釋尊に捧げていはく、我が佛はもつて首長とし、佛弟子を教へたまふ場所のために、此の竹園を喜捨したてまつる、唯願くは哀愍を垂れさせられ納受したまへど。釋尊は默して其の地を受けたまひしもの、これぞ僧伽藍のはじめにして。宗教のため寺院を經營したる模範にてありき。頻婆沙羅王の喜捨は布施慈善の行をなしたるものにして、慳吝か貪慾か煩悩を滅せんことの意味にてありき。布施は他に喜びを與えんがために施すにあらで、自己の煩悩を滅ぼさんためといふ精神上の供養にてある。今聖武天皇の大經營の御願は慈行を親らとらせられたること、天下萬民を利せんとするために善なるにあらずして、自ら行ひをなしたまもふがゆゑに善なるべしといふ。萬乘の君と申しても自ら御手を下したまふにあらざりせば、眞との慈願善行に協はざるべければなり。然して後ち萬民にこの善行を教えんとして、行基菩薩に任じたまひては、天下に勸化をかさしめたもふ。其の精神修行の實現が此大經營としてあら

はれんとは、御信仰の靈火が燃えたるほど深く且つ大なるゆえなりしなり。なほ詳しくいへば聖武天皇は王者の威力と福業とをもつて此大佛をつくりましませしも、功德の勝利を百姓に分ち與えんがために天下に寄附を募りたまひしものなり。聖旨の存するところ奉戴せざるべからず。良辨僧正は聖武天皇のこの御願の善行に對しては恐れながら細大ともに諮問にあづかりたるは勿論にして、並びなき慈恵を垂れたまふことを勧めたてまつりたるなり。いか斗り重んぜられかつは崇められたるかは、良辨僧正のこの徳化にてしるべきなり。聖武天皇に慈行を勧めたてまつりたる良辨僧正は、其教化の勢は終に皇后の光明子にも傳えたてまつることゝはなりし。されば光明皇后の設立したもふころの癩病院のこききにいたつては、其の動機は良辨僧正の訓化の力によるといふべし。東大寺は聖武天皇の御聖慮を煩はしたまひて今や功を完ふせんごしたりしこき、光明皇后にはつらく、心中に思召ますやう、大佛の尊像も美事に造立をつけ、今又宏大なる殿堂も備はること皆な全きを得たりき。これ聖上の御

願につき朝暮其成効を祈りたまひし皇后に於ては天皇は外につこめたまふがゆえに、我は内心に造營を祈りける、彼の大功徳はここに勝れてこの成功を加えたりと。聊か誇りたまふの御意ありけるごき、或る夕べ殿中の空に聲を聞きたもふ、曰く后誇るなかれ妙觸宣明浴室澣濯不謂其功と。光明皇后怪しみこれをきゝたまひて、喜んで浴室を建立したまひ、貴賤こゝに浴を進めたまふ。皇后又誓願したもうやう我れ親ら千人の浴者の垢を去らんご、左右に待べるもの憚るごを聞えあげけるも、大悲の御願のつよきいかんごもなすを得じ、日毎に救ひたまふもの終に九百九十九人におよびぬ。最後に一人の病者來るものこそ、その身のすべて病毒に汚れ臭氣いはんかたなし。いかにしても光明皇后の御手にこの病者を扱ふごかたし。いかゞはせんご思ひめぐらしたもふやう、此の一人にして大願の千の數にみつべきにご意を決したまひて、忍びやかに彼れをいたわり不淨の背を清めたもふ。病人申すやう、我れ悪しき難病を受けてこの瘡を患ふるご年久し、良き醫者の教ゆるごころ、人をしてこの膿を吸はしむる

を得んには、癒ゆるごころたがいなしご。然れども世上には同情の志あるもの少なし、ゆえに病勢日に加えてかくも重くなりき。希くは君后には慈善の悲行を施したもふごき、はなはだ尊ごきご限りなしごいへど、我れを憐みたもふの御意いまさすやご。こゝにおいて光明皇后は哀願やむを得ずご思召して、彼の瘡をとりたまる頂上より踵にいたるまで全身すべて悲願の溫慈に清めをとりたまふ。然して光明皇后は病人にのたまふやう、汝が瘡をとりしこと人に語るなかれと。この御言葉を聞くと、彼の病人の身より大光明をはなち、忽ち妙相の姿とけはなり、告げていはく、皇后は今阿閃佛の垢を去りたるもの、又つゝしみて人に語るごきなかれと、光明皇后は驚きて見上げたまへば、五色の雲に乗り光輝の中に端嚴の佛となり、忽然として見へずなりしごぞ。この因縁によりその地に伽藍を排えしめ、阿閃寺とは申したまひきと。現在に奈良般若寺の傍らにその尊とけ遺跡は十八間浴室とぞ申しおりの。これを我國における癩病院をなこしたる始めの慈善事業にてある。宗教の眞實なる訓えはこれ等こそ尤も味ふべき感應

にして、佛陀の冥試は信仰の力によるものなれば、身を捨て、慈恵をたること、いかぞか菩薩の大悲にあらざればかなふべくもあらじ。大悲の善願をおこし大悲のためには、忍のびがたきをよくなし遂げたるもふこと、菩薩の權化なりと敬まひ、求道の佛陀ぞと崇めたてまつり、諡して仁聖皇后とぞ申し上げけ

る。良辨僧正は信仰界の權化ありければ、上は天皇皇后のため、仁慈の整頓を垂れさせたまふまで、訓化の教えを傳るたまふ。崇敬はますます厚くうけながら、自ら謹むことの深き、或る他の功名をてらふ者の如き野心ある所業は一もなかりける。佛教史上の傳記の表面には僧正の名の現はれざる者多きは、大事業をして上は天皇の慈願によつて現れ、下は他の僧侶に托して成就せしめ、常に外形に現るゝことは譲りて人に譽あるべくなごしめらる。されど良辨僧正の功蹟は覆ふべくもあらず、丹誠を如意輪觀世音菩薩にこめ、石山の月の影、黄金花咲く陸奥に、佛をかざる縁をしき、妙法の功力いよく現はれたる。良辨僧正の徳は佛

陀冥感によつてしられぬ。さしも大ある御堂の建立には、材木積んで山をなし、牛馬人夫の勞は勿論、運般のことも中々容易にてはあらじ。水運の便により寄せ来る大材巨木、山城の川に流すところ、これより木津川とは名ついたり。良辨僧正は笠置の山頂に籠り修法の妙力をもつて巨巖を砕き、水流涸れるときは、雨請ひして大雨に水勢を増し、白雲おこるところ、水流の漲ぎるところは材木の飛往くがとき、妙功力を現すこと屢なりき。大佛造立の善根勝利をして、普く天下の百姓に分たんため、勸進する誘導のことは行基菩薩に命ぜられ、天平十五年の十月、大詔の御主意による。良辨僧正は弘く民情に通じたる行基菩薩を推薦して、名譽ある立役を委ねんことを申し上げぬ、行基菩薩は東に奔りては布教の聲を傳え、西に馳ては佛縁の合力を勧め、天皇の大御心と佛陀の慈悲とは、滿天下に教導したる効は、實に著しき効果を奏したてまつる。これ良辨僧正の内助の力は、大に行基菩薩の擧をたすけたること疑ふべくもあらず。天平十六年には行基に位を授けたまひ、大僧正に補したもふことあり、

これぞ我國に大僧正の僧位あるのはじめなるべし、七十有餘の高齡なる老僧の身を思はしめたまひて、行基には特に轡車を授けたまひ、乗車のまゝ宮中に入を許したもふ。菩薩は喜こびの餘りに詠せし歌あり「飛ぶくるまわれにたまへりいかにも、もろどもにこそ送りわたさめ」。其の御信任の厚き、老軀を慈しみたもふの深き、老僧行基菩薩は感泣したたまつりしならん。僧正は共に悦び仁慈を謝したることまた美しき徳なるべし。同門中におゐて尤も親しかりし行基菩薩は、大佛の大像成るを見ませしも、殿堂の壯觀を見たまはずして、天平勝寶元年に八十歳を名残りに、終に入滅したりける。臨終にのぞんで「かりそめの宿かる我ぞ今さらに、物なおもひぞ佛とおなる」一豈に味ひ深き歌にあらずや。良辨僧正の落膽のはせいか斗りなりしぞ。茲に僧正の御弟子中にも、智識なりとの名高かりしところの、實忠和尚といふ方のおわしける。よく良辨僧正の意を帯して、造佛の大經營に盡碎したる一人にてある。天皇の大命を稟け、師たる僧正に隨從し、大佛造像を助けたたまつる。五丈三尺五寸の尊像に

添えたてまつるところの、巨大なる御光を造らんとするとき、都市の工人等はいかに大きなるものゆへに誰れか此の事を承がうものなかりき。實忠和尚は大工小工のものを集め、自ら彼等を指揮し、工を督し役を勵まして、本尊に相應しき御光を構えんとす。其の高さ拾壹丈にあまる大御光、五百餘軀の佛像を附けまつるといふ。和尚の苦心によつて美事に大御光の工は竣りを告げぬ。皆々の人々その功を賞めぬはなかりき。いよくこれを御佛の背後に建てまいらせんとせしに、佛の御頂と御堂の天井と間相近くして、頗る狭きおもひするのみか、漸く苦心の結果成功せし御光も建るによしなし。此處に在る大佛師大工どもを一堂に集めて商議をこらせしに、彼等は堂の總てにおゐて缺點なければ、大御光をして今少し切り縮めらるゝの外、道なかるべしと申す。彼等の申すがごとくせんか、本尊に相應しからず、和尚の焦慮せしとはかりがたし。終に大膽にも造寺長官の許へ大殿の天井をして、大御光建てまるらす寸法に切上げよと請求したりける。されども造寺の役員等は、拒んで切上げを肯はずり

き、ここにおゐて和尚は嘆じていはく、國家の本尊を造りたてまつりたもふ御主願は、これ天下萬年の福利を祈らせたまふもの。然るに今本尊相應の御光を建つる能はずんば、後年のそしりを招き、邦家の缺點之より甚しきはなし、且つ佛意に違ふことを恐ると、事の始末を上奏に及びける。朝廷は和尚の申請のため熟議を遂げ、終に佛殿の天井をして、大御光建てまいらするべく、更に一丈を切りあげることに決したり。けだし現時なほ其の形状を繼ぎ、いまの建築家の所謂大佛様式と申すもの、この繰り上げ天井の方法は、實に和尚のときに始まれるなり。なほ和尚の作業としては、東西三十二丈の高塔の頂上におくべきところの、大なる銅の露盤を登ぼすことなり。帝都に仕事する棟梁も、高さ三十丈の上に、重き大露盤を置く方法につきては、器械を使用すること少なき千百餘年の昔、爲す術もさへ知らざりける。和尚は或る方法を案じ、幾百の工役を勵まして、自ら高塔の頂上に登り、指揮の下に、此の大露盤を七重屋上に置ことを得たりける。以上は東大寺要録中にある實忠和尚二十九箇條文の一なり。

りき。以て和尚の苦心を凝らして、よく良辨僧正の師命に従ひ、造寺の大經營を助けたるを証するに足るべし。嗚呼斯る智識等の出でませし時にあらずんば、驚ろくべき大佛像の造作といひ、宏壯なる大殿堂の竣功は到底覺束なかるべきなり。

聖武天皇、皇太后、光明皇后は菩薩戒を受けたまひ、天皇は法名を勝滿と名乗りたまひ、光明皇后は法名を德滿と名乗らせたまひ、皇太后は法名を萬福とぞ申したまひける。時こゝに天平勝寶元年(千七百七十年前)七月に聖武天皇は御位を皇太子に譲りたまふ。これよりは孝謙天皇の、皇統を繼せたもふと、は申せども、女帝にますくのみならず、太上天皇とならせたまふも聖武天皇は、未だ老衰したまひしにはあらず、されば萬機はいまだ太上天皇の御手にありしなり。大猷願をおこしたもふてより、歲月は早十年を経たり、御願はすゝみてこゝに滿ち終へ、天平勝寶四年(千六百六十七年前)四月にいたり、毘盧舍那大佛像はその功を奏す。黄金をもつて御佛の膚をみがきたれば、さしもの大像は金光赫灼として

人目を奪ひ、三十二相の金姿は、渴仰の信をおこさしむ。宏大無比の大佛殿は出来上り、こゝに一大盛んなる落慶の式を擧げさせたもふ。當日の佛事には、畏くも今上天皇(孝謙)太上天皇(聖武)皇太后(光明皇后)の三陛下をはじめ奉り、皇子親王にいたるまで臨ませられ、以下文武百官は行幸啓に供奉したてまつる。其の威儀の整然たる式場には、陛下は百萬の僧侶に擁せられたまひて、この最勝法身の毘盧舍那佛、すなはち天照大神の御本地にてある、大佛尊像の前に北面したまひしなり。齋を設け大會を行はせたまふことのいと厳かにして、五位以下は禮服を着せしめ、六位以下は常色の服なりと定めたまひ、参列するもの、盛装は、重きこと恰も元日朝賀の式と等しかるべきと令せらる。開眼の導師婆羅門僧正は、白衣の法服けたかく、大筆をさしけもつて、佛の青蓮の脛をひらかしむ。良辨僧正は法要の主宰として式場を護り、隆尊律師は美聲はがらかに法音をあく。幾十萬の清僧等は居ならびて、梵唄の法式をひらき、散華の大衆は、法香を大殿にみたしめ、梵音の妙曲は、威儀を擧のへ。錫杖の九輪は、菩薩の歡喜を仰ぐ。香華供養の莊大なる、諷誦の美聲は堂外に漏れ、華構は讚經の讚辭にみちくたり。蘭奢の香は高く匂ひ、寶殿の式場は華雲の粧ひをこらす。嗚乎盛んなるかな、尊ひかな、皇國の盛運は、此大典の式に知らる。なほ雅樂寮よりは式衆の群をせり。諸省よりの音樂あり、諸王諸官より樂を奏するあり。五節舞、久米舞、楯伏、踏歌、袍袴等の歌舞をたてまつること、東西聲を發し、南北舞踏に應じ、天地の妙音、秘曲の雅樂、舞樂は庭に行われ、武樂は外におこる。二十五菩薩は影向して、遙に玄武山に登り、五百の羅漢は工匠の化現として、南山に遊ぶ。妙樂の庭には奇異の勝縁をたれ。瑞相の不思議あけて敷えがたし。佛法我國に初まりし以來、大佛落慶式のととき齋會の儀式の盛大なること、未だ嘗て見聞せざりしところなりといふ、以て其の壯觀なりしことをおもふべきなり。猶又歴史の上においても、我國において壯觀なる儀式は奈良朝のときの盛なるに過ぎたるもの未だあらざるべしといふ。

良辨僧正は帝師の譽れをもつて、其名聲は朝野にきこえ、天皇の御歸依の深厚

なりしこと、皆を共に羨まざるはなかりき。されば日本惣國分寺として、鎮護國家の靈刹として、天皇の直轄しますところの、帝都の一大伽藍すなはち東大寺は、今宮中の尊敬を一身にうけたる良辨僧正の管理するところとなり。其盛なる東大寺の威力は、天皇勅願寺中の冠たるものにてあるき。當時の政治宗教の調和なりし東大寺の十餘丈の大伽藍は、緇素といはせ、貴賤といはず、五畿七道の信仰の中心なりと尊敬されぬ。諸國の佛教の中心は奈良にあり。奈良の中心は天皇が歸依したもふ東大寺の毘盧舍那大佛像にあり。更に詳しく申せば日本の毘盧舍那佛か、毘盧舍那佛の日本なるかとまで崇められぬ。三陛下の北面禮拜したまひし大佛像は、良辨僧正の國家を祈願する本尊なると共に、華嚴法身の教主なればなり。良辨僧正の光明は、黄金をもつて膚をみがきたてまつりたる本尊と共に、光輝赫々として教界を睥睨したり。嘗ては金鷲大菩薩と崇られ、普賢の行願は効をつみかさね、今や良辨僧正は十地等覺の尊とき位ひにのぼりたるものゝとせし。されば所因はふかくして、權者の再誕なりければ

金色なす靈鷲の縁をかり玉ふて、舍那造立の爲に此土にたれ玉ふ。疑ふらくは往昔天竺の釋迦世尊が、隨機をもつて所變の形を現し、舍那嚴王黄金の姿を現はさんが爲に、遠く東海の國は大衆相應の地なるをしらしめし。淨滿華王嚴淨の寶殿をたちさりて、諸の衆生を利益せしめ、菩提の良縁をむすはしめんと思召して、鷲峯の山より翔け下りて、相模の國よりはるくと、嬰兒をとりて大伽藍のたてまいらす所におかせたまひけるにや。釋尊は彌勒菩薩を補處として、滅後の利益を托したもふ。金色の鷲は彌勒應化の良辨僧正をして、はくも育てもつて末世の衆生をすくはんとす。嗚呼佛陀の方便のいたれる冥感の理これ新たにして、菩薩の善巧なる手段はいよく尊とく感ぜられぬ。さても良辨僧正は奇縁こゝに時いたり、所生の親の恩徳を謝したもふ一念と、慈母の山河を馳せ巡り、愛子を求めたもふ一念と、合感妙理の結ばれて、親子再會したもふ機運の熟したるこそめでたけれ。良辨僧正は前に述べけるごとく、二歳の幼兒のときに、荒くれ鷲にとらはれた

まひ、奈良の山中において危き難を義洲僧正に救はれて、今日あるの僥倖を得たまひき。夫がため母御の悲嘆はやるせなく、東に西に國といふ國かけめぐりたまひ、數十年の其間愛兒の外に見るものもなく探りたまひぬ。さる程に遙か西國の方まで尋ねたまへど、似寄ることだも見聞せず、便船に乗りて淀川をわたり。往方いづくとうち案じたまふ。乗合船の常として世話のくさく物語る。もしや便りも得んものと耳かたむけて聞たまへば。世はさまざまの事もあり、こゝに不思議といふは、東大寺の尊師良辨僧正と申す聖りは、赤子の時驚に捉われて在せしも、佛法の貫首たるべき徳者なれば、鳥類なれども害をなさず養ひしとか。今は東大寺の別當となりたもふて、明日は晋山のために拜堂のあるときなりと。是を聞たる母御の胸中におもひたまふやう、我が子の行衛これなるべし、と歡喜の涙とよめあえず、永年の疑團こゝに晴れ、急ぎて東大寺さして尋ねゆきたもふ。その日は東大寺別當の拜堂なされるとて、南大門には寺の僧官集まりをなし、供奉のともから數多く、境内の道路清くして、嚴重なることいと

整然たり。近付て子細を述べたもふべきやうもなし、只管門の傍にたちやすらいておはします。扱一人の僧にかたりますやう、別當僧正御房へ申し上る事はべり、願くは傳へ申されたし。我はこれ相摸國漆部氏の妻にして、まことの僧正御房を産みたてまつる母にてぞある。されど驚にさられまし、かども、懷妊の始より命もなかく壯健ならんため、しるしをしてければ。驚もむなしく壽を奪るまいらせざらん。我が命のある間に今一度見まいらせんとて本國を出て、幾十年の間津々浦々の果までも探つるなり、去る人の物語を聞きつたえ、たのみ少なき露の命の消えやらぬ内に、はやく見えまいらせたと、いと懇に申入給ふ。寺僧はこのよしを具さに良辨僧正に申し上ぐ、僧正はおどろき此の事を聞て、急ぎ母御のいますところによき、悦びの涙せきあえせ、聲ぐもりてかたりたまはく、我れを生みませし恩は、元よりふかきが上に、三十餘年の其間心をつくし身をくるしめたてまつること、此の大恩は、劫を経て報じかたく、多生を重ねてもむくひがたし。幸に今見たてまつること得たりと、悲喜交々胸にせまり、熱涙はおさ

へがたしとて、法衣の袖より掌を出たし、母御を禮拜したまひしと。實に恩愛の情の深きこと、かくあるも道理なり。さても良辨僧正は母御に再會したることの、悦びのあまり同道したまひて、九重高く参内して、母御の尋ね來ませしよしを奏上したまひぬ。太上天皇にはあはれみを垂させられ、母子を殿上にめしたまひて、のたまはくやう汝宿生の契りによりて、良辨の生母となれり、其身賤といへども宿善もつとも貴かるべしとて、聖武禪定法皇は、畏も十善の御手を拱して禮するが如くになしたまふ。直ちに官舎をたもふてやすめすゑさせたもふ。噫いかに鴻恩の厚かりしことよ、良辨僧正の歸依をうけたもふこと、母御にまで聖恩の及ぶは、母御のよろこび老眼は感泣の涙にみちたりけん。良辨僧正は朝夕母御に孝をもつてねんごろに事え、冬の寒さを思ひ、夏の暑さに見舞ひたもふことおろそかならず、日々に行きて恩顔を拜したまひき、孝養あつく事へたまへば其の所を孝養院とは申したり、傳へいふ今の東大寺の傍なる無量院といふは其の後ちなりと、母御は秋月落葉とともに逝きたまひぬとき。誓

はせたまひ、のちの者等の子の爲めに苦勞するものを助けやらんと、今に東大寺の境内に子安社といふは、母御の靈をまつるものなりといふ。印度にも支那にも未たなかりしころの大佛像は、聖武天皇の帝威をもつて造らしめたまひ。日本第一の大寺なる東大寺は、帝都の地に宏大なる伽藍は構えられぬ。此寺は時の佛教を傳えける宗派、もしくは學派の總てを兼ねる總本山とは定められたり。奈良朝當時の佛教には六宗を唱えられき、その六宗とは何々なりやと申せば、三論宗、法相宗、華嚴宗、俱舍宗、成實宗、律宗これなり是を南都の六宗と申しおれり。然る後ち平安朝の佛教にいたつて、天台宗、眞言宗はおこりければ之れを合して八宗と數えたり。東大寺とは是等の八宗の宗學をして皆な學はしむべき、所謂八宗兼學の總本山にてぞある、されば東大寺の本尊たる大佛舎那の御佛は、其ま、八宗の本尊と崇むべきこと、はなれり。こゝにおるて名聲の高き菩薩の權化と仰がれたる良辨僧正は、天平勝寶四年(千百五十六年前)五月一日をもつて、八宗の總本山日本總國分寺といふ。東大

寺別當職の重き任を命ぜられたり。佛教の各宗は當時この大任の第一世たる良辨僧正を瞻仰したること、日本佛教の總棟梁として服したりき、其の別當職として寺務を司ること九年にして、弟子良興に譲りたもふこと、なる。先きに良辨僧正は、我國佛教いよく盛んなりといへども、未だ傳律の戒師なきことを嘆きて、上奏して唐土に招聘せんことを望みしに、天皇は之を嘉納したまひて奥福寺の榮睿と、大安寺の普照とを入唐せしめ、傳律の戒師を、唐の揚州龍興寺に招聘のため使したもふ。久しく海上に難波の苦を凌ひて、こゝに我國の傳律の初祖として、鑑真和尚は來朝したりける、良辨僧正は出て迎ひ、天皇に授戒をうけたもふべく勧めたりき、莊麗美觀の大佛殿の前面において、授戒の式壇をしつらゑ、上は今上天皇をはじめたてまつり、太上天皇皇太后、王子親主等菩薩戒をうけたもふ。文武の官人隨喜して、三歸五戒をうくる者數へがたし。良辨僧正は更に上奏して、日本に三所の戒壇を設けて、弘く十善淨戒よりはじめ導かんことを勧めたてまつる。勅して是をつくらしめたもふ、其の三戒壇とは、

大和東大寺戒壇堂、下野國藥師寺戒壇堂、筑前國觀世音寺戒壇堂これなり、今は年ふる名残りとして、藥師寺觀世音寺の兩戒壇は、久しく荒敗して遺跡のみとなれるぞかなし。されは當時の佛は、東大寺の戒壇にのみ現存の姿を拜するを得べし。天皇の御戒師をつとめたる唐僧鑑真和尚は、其の後ち足を此の土に止め、何とぞ戒律を専らに弘通せんとの志ありければ、孝謙今上陛下には御願を起させられ、大和に唐招提寺といふ伽藍を建立なさしめ、鑑真和尚を開基として、永く律宗専門の本山と定めたもふ。天平勝寶八年（千百五十二年）勅して封戸水田等をたまひ、勅額を下賜せられ、三面の僧坊は律儀の窓を開き、戒學の隆んなりしこと、今其の伽藍の宏壯なるにても窺ひしらるべきなり。又良辨僧正は道融を請ひいれて、梵網經の講讚を開かしめたもふ。我朝におひて布薩の法を行ふこと茲にはじまる、律宗の上にも復た良辨僧正の効少なしとせず、且つ諸寺の智識を招き、大徳を集めては法華會をはじめ行はれしといふ。年々千百年の後ちにいたつて、この英豪なる智識を評したてまつるは、徳を汚

すの恐れあらんかなれども、少しく卑見を陳じおかんとす。良辨僧正は幾多の道場を建立したまひ、衆を誘ひ縁を求めて、布薩の法をはじめ行ひ、法華會を創めたもふとときは、遠く青年の時代より佛者として、修法三昧の經歷あることは義淵師僧の門中におゐて、最も玄理に通し冥感を詳しくしたる方にてありしならん、さらば眞の佛者として佛學者にてはあらざりしかと申せば、僧正は實に華嚴宗を開きたもふたり、これ深玄の妙理を味ひ、盡々微妙の學を究めたもふにあらざりせば、此法相三論の教學尤も盛んを極めたる時に、超然と獨り權教の系脈を離れたまひ。別に一乘の門戸を新たに開くことを得たもふこと難ければなり。されば大事業を上げたまへる、良辨僧正あると共に、眞實佛者としての、權化の良辨僧正を仰ぎ、教學家として華嚴宗の初祖でありし大智識良辨僧正を見たてまつり。猶東大寺別當第一世でありしところの高僧良辨僧正を崇めまつる。尊ひかな僧正の學風、敬ふべきかな開山の徳化、我等其の末流を瀆すこと何の幸福ぞや。僧正を信仰するもの其の威徳を尊敬すべきことにこそ。

良辨僧正は多年の宿願の機は熟し、母御の慈願を拜させたまひ、専ら孝養を竭したまへども、走る月日は時迫り、母御は臨終の縁に迎へられ他界せられたまふ。僧正は生母に悲哀の永別をつけさせられてより、己が生誕の地を知るからに、郷土を懐ひたもふと切なりければ、翻然として奈良を立ち出で、錫杖を相摸の國は親しみふかき故郷に入れたまふ。二歳のとき鷲のために捉られてより、良辨僧正は七十餘の老僧となりたまひ、嘗ては嬰兒の姿なりけれど、今は官衣法服を着て、天下に其名聞かざるはなき大智識が、遙はると親しき無二の故郷に歸りたもふといへど、見聞は皆新らしく、風土は悉くめづらし、異様の感にうたれたもふも道理なり。相摸とは是東海道十五箇國の一にして、關東八州の随一たり、武將源賴朝が、覇府を鎌倉に開きしより、天下の中心とはなりたれど、遠く天平の時代には三百餘年の昔なれば、史蹟に徴するもの極めて少なし。況んや山川國土の開けざる時、良辨僧正は足に任せて所々を巡り、勝地を探りたもふ。これを慈悲の内心より見たまいて、救世のため公益をはかり、國土を利益せし

むべく、伽藍を建立して、もつて紀念の事業をあけ、衆生を化益し、良縁に導か
 んどの思ひを抱きたまへば。只管清淨の靈地を撰み求めたまひける。茲に國の
 西北隅にあつて、峻嶺巍峨として聳えたつ高き山あり。その山の形ち天下に
 甲たるもの、又た衆山に勝れたるをもつて名けて大山といふ、實に海上を積く
 ごと、參千八百六拾尺の高峯にてある。良辨僧正は其の奇山靈峯あるを悦び、
 峻阪を登り、谿間に下り。晝なを暗き深洞を探り、澤を下る數流の瀑布を見て
 は清水に身垢を去り。嶮嶮屈曲の間を攀ちて、終に半天高く神仙常に遊化べる
 頂上に至りたまふ。青樹の累々としたるものを足下に踏み、遙に海波の洋々を瞰
 下するを得る。此の山は雨降山とも云ふ、登山降雨に遭ふこと多し、これ山雨
 にして他に及ばざれば、土人これを私雨と稱し、雨降山の名こゝに起る、夫木
 集に、「立よれど雨降山の木のもとには、頼むかひなくおもほゆるかな」とあるは
 降雨のしきりなりしを、詠せしもの思ひ合すべきな。
 さても良辨僧正は雨降山といふ此靈山に登り給ひて、衆生化益のためにとて、

一箇の靈石に親から十一面觀世音菩薩を刻りたまひ、之を山上に安置した
 もふ。これを石尊權現と申したてまつる本尊なりし。大山縁起にいはく、山嶺
 におゐるて草木を芟りすて、土を穿つてば、石像の不動明王を得たりと、夫れか
 あらぬか未だ何れなるをしらず。暫く讀者にまかすとせん。又縁起に曰く良辨
 僧正二重の瀧にいたりけるとき、瀧の上に石窟ありて、一童子忽然として現は
 れ告げて云く、山の絶頂には生身の不動尊あり、汝ち往て之を拜せよと。良辨
 僧正こゝにおいて山頂にいたり、三七日の間一心清淨の丹誠をこらしたまへば、
 奇瑞頻りにいたり不動明王出現したまひぬ、讚辭の偈を説きたもふ。言く三世の
 導師たる慈悲世尊は法華の生形を示現しますと云々。良辨僧正はこれ彌勒菩薩
 の化現にましますとせば、慈氏尊体の妙功力は、末世衆生のため福果善報の良縁を
 結ばしめんと。峨峨たる山路をうち開き、有縁登山の便をはかりたまひ、感
 得したる靈木をもつて尊像をつくり、四十九院の都率淨界を表じたもふ。山上
 の阿夫利神社は、大山祇尊、大雷神、高麗神の三社しつまりますは、開運勝利の

神と崇めまつる。曩には三尊の不動尊形を現はし、山の形は五大不動尊を表じたりと云ふ。神は守護の徳を垂れ給ひ、不動尊は福壽の願望を叶はせらる。良辨僧正は慈眼をもつて弘く衆生を見たまひ、靈山を探り奇峯を開きて、聖跡を垂れたもふ。此の山に一大伽藍を創造したもふもの、是れを大山寺と稱したりき。後ち是を公家に奏したてまつれば、天皇敕して御願寺と定めたもふ。良辨僧正佛堂を興し靈場を此山に開き終て再び奈良の地に向はせらる。其の外良辨僧正の開基したまひしは、近江國石山寺、世人は西國三十三所の第十三番の靈場として知るところの石山寺は、實に良辨僧正の開きたまひし所なり。其の由來は上來詳しく誌したればこゝに略しおかん、猶ほ其他に近江國內にゐる良辨僧正の開基の寺あり。金鐘寺、菩提寺これなり。傳え云ふ、僧正は奈良を朝に出立して近江の三箇寺を巡り、夕には奈良にかへり給ふし、良辨僧正は、孝謙天皇の御代なる寶龜四年(千百三十六年前)十一月十六日をもつて、壽算八十有五歳を一期の終として、入滅の相を示したもふ。こゝに

奈良朝の佛教の光明をそへたる偉傑の高僧をうしない、畏こくも優渥なる御恩の御沙汰を拜し、懇ろなる帝師の國禮をもつて遇せられたもふ。天下貴賤の道俗はその遺徳を追慕し、有縁無縁の善男信女等は、良辨僧正の涅槃に入りたもふを聞き、悲嘆の涙にむせばざるはなし。終に墓所を、大和國宇陀郡赤尾山林巽の丘に定め、恭しく葬りたてまつり、遺弟等の供養をうけたもふ。嗚呼菩薩の權化として現はれたまひし良辨僧正は、兜率の淨界に歸らんと此の土に縁をたちたもふ。悲願再び何れのところにか求めん、慈行再び拜しがたし、痛嘆の聲は日本全土に傳えられたり。抑も奈良朝のときの佛教界にゐるは、先進として義淵僧正の光輝を受けたまひ、同志としては事業家の行基菩薩あり。後進として現はれたもふ良辨僧正は、その廣長の舌は大悲の法音を傳え、廟堂に座しては帝師の尊敬をうけたまひ、百官は徳に靡きて禮拜をさぐく、貴となく賤となく大菩薩なりと仰がれたもふ。その教旨の源を探ては、華嚴の法味を開き、もつて一宗を開闢したまひき。深山に隠れては、奇瑞の妙光をあらはし、よく空前の

大事業を起しては、奈々大佛の偉業をのこし、世の人目を驚かしたもふ。是等は常識凡量の到底なすこと難しとするところなり。相摸の大山に登りては、衆生濟度の方便として、荆棘を開きては永久靈地として、後世に善男女の登山なすべき良縁を導きたもふ。八十有五年の僧正の生涯は、徳を養ひ、道を研め、僧行の佛者を守りて例等の傷徳を出さず。天下萬民の信標となり、雲上の帝王は之を徳範の師と崇め。沙門の所行以外には、一切顧みたまはざりき。佛意布教の高徳は、千百餘年の今なほ、昭々として光明ある僧正御一代の遺蹟を拜すべきなり。されば我國華嚴宗の初祖として出現したまひし良僧辨正の弟子に、宗系を繼ぐところの名僧また少なしとせず。僧正在世の時にあつて、門下の神足と申す方は八人ありき。實忠、良興、良慧、等定、永興、忠惠、鏡忍、永覺、等は親しく皆な僧正に資を稟けたる智識にして、これ等の方々によりて、後世いよ々々華嚴宗は盛大になりしなり。東大寺別當の大任は漸次に補せられ、第十四代の別當は、すなはち弘法大師其の職に任ぜられてより、三論華嚴の外に、眞

言宗よりも代々補せらるるゝところとなりき。三宗よりの時代の名僧を撰ぶるに實に東大寺別當の任命によるかためなりし。時は千百八十五年を経たる今日に良辨僧正の繼系者が、華嚴宗の管長をもつて相續することとなり、連綿たる良辨僧正の法系は、百二十三代の東大寺別當、現華嚴宗管長大僧正佐保山晋圓貫主現下によつて、相ひ續がせらるることの有難き。良辨僧正の因縁を垂れたまひしところの、奈良と大山と石山とを參拜したる現狀を略記せん。大和の奈良は、七朝帝都のありし土地なれば、千數百年の今日にも、なを翠巒丹堂の集まれる古都なり、三笠山頭の一輪の川月は、仲麻呂の愛郷の情切なりしを懷ふべく、仰て高塔を拜し、處々歴史の遺跡を探るべし。杖を一度び古刹に曳けば風雨千年の時は過ぎたれども、高く何天皇の勅額といふを懸けたる門あるぞ、いやが上にも尊ごかるべし。山は綠色に包まれ、堂塔は丹色に塗られて、春日神鹿の悠々たる芝生は、さながら古土佐の繪巻物みるこゝちする。天然の奈良、自然の公園は、詩味に満たるところなりとは、某風流の伯

が賞したる所なり。奈良に紹介すべきもの三つ、大佛殿の宏壯と、春日神社の森嚴と、興福寺の靜かなるとは、旅する人に教ゆべき奈良なり。此の地は良辨僧正の修養の地なり、一代事業の擧げたまふ所なり。是僧正に因縁尤も厚き奈良の現在の有様である。相摸の大山は、東京を去る拾八里、相摸と云へばこれ關東八州の覇府ありし地、古戰場は多く、史蹟は累々として、古趾に富む。東海線中平塚驛に下りなば、三里にして大山麓の町に達すべし。見上れば巍峨として愛甲仲の二郡に跨る高山にして、山道登ること壹里三拾町、頂上には阿夫利神社あり、これ大山祇神をまつる。奇巖をくゞり、危阪をよちて、崖を越へ岩に逼ふ、或は龍の踊るがとき、或は虎の嘯くがごとし、怪岩の狀、幽溪仙境の様、筆紙につくしがたし。老杉松柏は巨巖に添ひ、樹間の溫度稍低きを覺ふ。中腹に大山不動堂あり、拜殿、明王院等何れも結構大なる靈場に詣するを得べし。冷流清泉の落つる瀑布又多し、最も名あるものは良辨瀧、大瀧、二重瀧、元瀧等水勢強かるべし、毎年遠近の國々より登山するもの踵を接す、特に

七月二十七日より八月十六日まで世俗大山詣と申して多人數參詣する有様いとも盛んなるものなるべし。手には各杖を携へ、白衣を身に裝ひ、腰に鈴をつり、六根清淨の懸壁勇ましく、深山をわけ登ること、雄々しくも殊勝なるものなり。試みに頂上に登りて、四方の景を眺めんか、遙に相模灘は海波洋々たるを望むべく、有名なる富士の高峯は呼べば答ふるが如し。消夏の登山は、塵外清鮮の空氣を吸ひ、神氣の爽快なること、人家の室内に呻吟するもの、知らざるどころなり。この山はこれ良辨僧正の開きたもふどころ、この國はこれ良辨僧正の生誕の地、又因縁の深厚なることを忘るべからず。近江國石山寺は滋賀郡石山村にあり、西國三十三所の第十三番の靈場にして、琵琶湖により巨巖もつて山をなすところ、近江八景の隨一にして石山の賞月は世に有名なる勝地なり、紫式部の物語をものせしといふはこの觀音堂の局なるべし。前には潺湲と流る、勢多川を控へ、遙かに漫々たる湖水を見、蟠屈せる巖上、によく大悲の寶閣を構ふ。良辨僧正の靈地を撰ぶこと、地理上にも又凡庸ならざりしを知るべ

し、山城國の相樂郡笠置山上の巨巖三丈餘の屹立するところ、僧正自作の彌勒菩薩の大像刻りつけたもふあり。是等は皆な僧正の修法功力を専らにする、靈場として千餘年の今日、皆な人の化益をうけおるどころなり。佛陀の應化たる良辨僧正、徳高きこと須彌のとき、學深きこと大海のとき、僧正の大山を開基したまひ。歲月千餘の久しきにわたり、石尊の御光りは萬世を照らし、不動の威徳は現當にわたり。二世の利益は今なを福壽無量の信授を垂れさせたもふとはいへ、災火屢々この靈地を襲ひ、伽藍は失せ、坊舎は亡ぶの障りは免れず、されども良辨僧正の靈像は終に全きを得たりける。良辨瀧の守護者たる藤の坊、龜井正繩氏は假堂に安じたてまつり、尊敬のまことを捧げ守護し來りしなり。されど僧正の徳は未だ世に顯はれたまはず靈地に詣てるもの其の僧正の開基たるを知るもの稀れに、まして賽意の心なく、空しく扉は鎖され、香花の供養にいたらざりき。茲に有信の篤志は申し合せ議をこらし、巍峨たる大山は神意の靈地、明王の加護尊としといふべし。されど人として其の源を忘

れざらめや、報恩の赤心を良辨僧正に致し、謝徳の信仰を開山尊師に捧ぐべし。遠く大悲の開山良辨僧正いませばこそ、今日災厄を経るもなを、勝地靈場の地に参詣し、弘大の利益限をしらず。いかでか良辨僧正の威徳をかざり、再び安置したてまつる堂を造り奉らんと。談は結び、議は決し、善男は之がために思をこらし、善女は茲に信仰のまことをいたし。日ならずして茲に開山講といふ同志をつくり、終には年を重ねざるに早や一堂の構えをおはる。良辨僧正の開山堂は大山開山町良辨瀧の傍に造りたてまつる。この善事業は、大山のあらんかぎり靈場を此所にたもつこと、良辨僧正の冥護に叶ふべきことなり。もつて阿夫利神社の神徳を進めたてまつり、不動慈尊の哀愍を仰ぐ、開山講の主旨こゝにありと聞く。善哉篤信の善男善女、福徳はこの善因にこたへ、意願は成就の福果を増さんこと疑ひなし。開山良辨僧正を尊信する人は、佛陀の勝れたもふ功徳を稱歎しまつるべし、普賢の行願は弘大の利益たれさせたまひ。現在には家内安全商賣繁昌福壽増進の願望は悉く成滿せん、當來には皆を佛界に往詣して

兜率淨刹に安ずることを得ん、三世十方の諸佛哀愍加護を垂れたもふがゆえなり。開山講の諸士よいよ各の職を勵み、ますます良辨尊師を信仰したまへかし、この良辨僧正の御傳記を讀み終るごきには、必ず左の佛名を三遍つゝ唱えられんことを勸むるものなり。

南無華嚴教主盧舍那佛

南無當來教主彌勒菩薩

南無大慈大悲觀自在菩薩

南無開山良辨尊師

願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道

良辨僧正御傳記終

功德主

稻垣晋清

東京高橋源造

今野半兵衛

井上八三郎

濱田宇之助

大木五郎七

梶間吉五郎

神々廻清七

加藤鍛三郎

高津民藏

高橋喜三郎

内山喜助

黒瀬茂三郎

松田直太郎

槇嶋宗吉

丸山弘方

藤谷金兵衛

小林宗一郎

小林政治郎

佐藤富太郎

宮田銀之助

平野豊次郎 大山吉川 善藏 大山小笠原三次

爲各願圓滿正法興隆利益衆生乃至法界平等拔濟也

明治四十二年七月廿九日印刷

明治四十二年八月一日發行

施本

著作者

稻垣晋清

東京市神田區豊島町廿八番地

印刷行人衆

長谷川幾松

東京市神田區豊島町卅番地

印刷所

藤井印刷所

324
142

